

シェリング
ドイツ観念論哲学の要
ベルリン大学の栄光 第3部
ドイツ アカデミック街道を歩く 丹野義彦（東京大学名誉教授）

ドイツ アカデミック街道を歩く

大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の4部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒ、ミュンヘンの次は、ベルリンをとりあげる。ベルリンほど奥が深く面白い都市はない。

まず、ベルリン大学の歴史について5つに分けて述べる。本論はその第3部に当たる。

◆ベルリン大学の栄光
第1部 創立の謎 フンボルト理念のウソとシュライアマハー
第2部 フィヒテ 初代公選学長
第3部 シェリング ドイツ観念論哲学の要
第4部 ブラック・ヘーゲル入門 隠蔽された哲学者の恋
第5部 プロレスとしてのドイツ観念論哲学 ー哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学ー

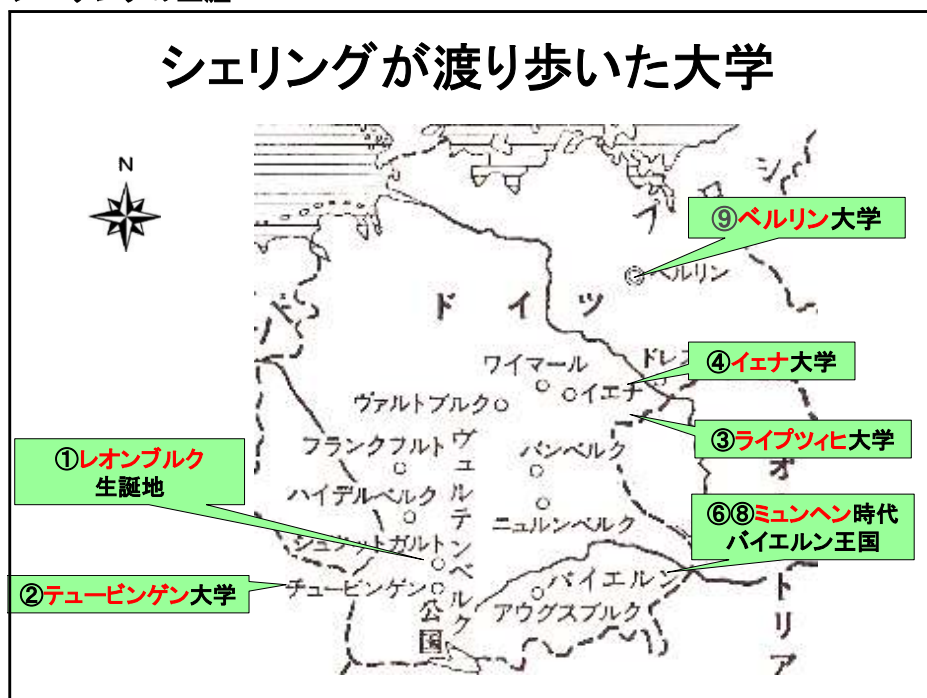
第3部 シェリング：ドイツ観念論哲学の要（かなめ）

シェリングは、フィヒテ、ヘーゲルと並んでドイツ観念論哲学のビッグ3として有名である。

3人はいずれもベルリン大学の教授をつとめた。また、3人はイエナ大学の教員であったが、そこで繰り広げられたドラマは哲学史上最も面白いドラマといえる。その中心にいたのがシェリングであり、フィヒテとヘーゲルを結びつけた張本人はシェリングである。もしシェリングがいなかったら、ドイツ観念論哲学は存在しなかったかもしれない。その意味でシェリングはドイツ観念論哲学の要（かなめ）の位置にある。

ここでは、シェリングの人生と哲学を辿り、ベルリン大学との関係を見てみよう。

シェリングの生涯



シェリングは、多くの大学を渡り歩いた人生であった。

15歳でテュービンゲン大学に入り、ライプツィヒ大学で学んだ。すぐにイエナ大学から声がかかり、23歳でイエナ大学助教授となった。それから、ヴュルツブルク大学、エルランゲン大学、ミュンヘン大学、ベルリン大学と、ずっと大学ですごした。31歳～45歳までの14年間は大学を離れたが、第一線から離れて不調となり、「沈黙の時代」と呼ばれた。シェリングは典型的な大学人といえよう。

◆シェリングの生涯

	年	年齢		場所	哲学思想
①	1775	0歳	レオンブルクに生まれる ニュルティンゲンのラテン語学校、 ベーベンハウゼンの神学校で学ぶ	レオンブルク ニュルティンゲン ベーベンハウゼン	
②	1790	15歳	テュービンゲン大学神学校で学ぶ	テュービンゲン	フィヒテの自我哲学
③	1796	21歳	ライプツィヒ大学で学ぶ	ライプツィヒ	自然哲学
④	1798	23歳	イエナ大学助教授	イエナ	超越論的観念論 同一哲学
⑤	1803	28歳	ヴュルツブルク大学教授	ヴュルツブルク	同一哲学
⑥	1806	31歳	ミュンヘンで文化行政	ミュンヘン	「沈黙の時代」
⑦	1820	45歳	エルランゲン大学教授	エルランゲン	啓示と神話の哲学
⑧	1827	52歳	ミュンヘン大学教授	ミュンヘン	積極哲学
⑨	1841 1854	65歳 79歳	ベルリン大学教授 死亡	ベルリン	積極哲学

丸数字は地図の番号と対応する

シェリングは主張を大きく変えた哲学者である。上の表に示すように、はじめはフィヒテの自我哲学に熱中した。フィヒテの説を補うために「自然哲学」を取り入れたが、これによってしだいにフィヒテから独立し、「超越論的観念論」をへて、「同一哲学」を完成させた。しかし、同一哲学はヘーゲルから根本的な批判を受けた。その後、啓示と神話の哲学に向かった。ヘーゲルの死後、ベルリン大学に呼ばれて、ヘーゲル学説を徹底的に批判し、積極哲学をとらえた。

以下、上の表にしたがって、9つの時期に分けて述べる。

①誕生から中等教育

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling) は、1775年、ヴュルテンベルク公国のレオンベルクで生まれた。レオンベルクの町は、天文学者のヨハネス・ケプラーが学生時代を送った場所である。

シェリングの父は聖職者で、1877年に、チュービンゲン近くのパールハウゼン村の修道院の牧師となり、そこで東洋学の教授をつとめた。シェリングもパールハウゼンの地で成長した。

シェリングは、9歳で、シュトゥットガルト近くのニュルティンゲンにあるラテン語学校に入学した。この学校には、5歳年上のヘルダーリン (Johann Hölderlin; 1770~1843年) も在学していた。11歳で卒業するまでに、将来チュービンゲン大学で神学を修める者のための地方試験に合格したという。

11歳のシェリングは、パールハウゼン修道院の上級課程(いわゆる高等学校に当たる)に入って学んだ。このパールハウゼン修道院の上級課程は、マウルプロンとシュトゥットガルト王立高等学校と並んで、チュービンゲン大学に進学するエリートコースであった。

シェリングは、15歳までの間に、言語、歴史、論理学、算数、幾何の試験に合格して、大学入学資格者となったというから、驚くべき早熟である。

②チュービンゲン大学で学ぶ 1790~1796年

早熟の天才

1790年、15歳のシェリングは、チュービンゲン大学に入った。大学はふつう18歳で入学するのがふつうなので、3年も早い。いわゆる飛び級で進学したことになる。本人の学力も相当なものだっただろうが、父親が聖職者だったので、親のコネの力も大きかったかもしれない。このように恵まれた家庭に育ち、才能を開花させたシェリングは、早熟の天才であった。

クローネン・フィッシャー (1901) は、シェリングについて次のように述べている。

16歳ですでに大学生であり院生であるような人で、プロモーション (進学) のときは一番、ヘブライ語知識は抜群、パールハウゼンの牧師にして教授であった父が一七九〇年一〇月にこの息子をチュービンゲン神学院に送り届けたとき、自分で特色づけているように、まさに「早熟の天才」であった。

フィッシャー (玉井茂・磯江景孜訳) 『ヘーゲルの生涯』

チュービンゲン大学は前期2年、後期3年の5年制であった。シェリングは、前期2年は哲学を中心とする一般教育を学び、後期3年は神学部に進み、神学を学んだ。

最初の2年の哲学では、15歳のシェリングは、ベック、フラット (92年3月以降神学部助教授)、アーベルといった教官の講義を受けた。とくに、フラットからカントの『純粋理性批判』の講義を受けた。また、シュヌーラーから旧約・新約聖書の講義を受けた。シェリングの指導教官はこのシュヌーラーであり、ヘブライ語を勉強し、オリエントの研究をした。

前期2年の最後には、シュヌーラーの指導のもと『人間の悪の始元に関する創世記第三章の最古の哲学問題解明のための批判的哲学的試論』という神学の学士論文を書いた。また、その参考論文として、哲学論文も下書いたが、それはラインホルトとカントに関するものであった。この頃から哲学には大いなる関心をいだいていた。

17歳で、後期の神学部に進んだ。教官は、ル・プレ、ウーラント、シェトール、前述のフラットといった面々であった。

20歳で、シェトールの指導のもと、卒業論文『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を提出し、合格した。20歳でチュービンゲン大学を卒業したのである。

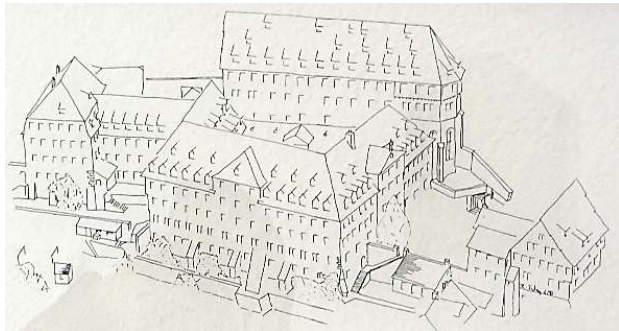
その後、シュトゥットガルトで神学試験に合格した。しかし、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。

チュービンゲンの神学校 (エヴァンゲリッシュ・シュティフト)

テュービンゲンの神学校 (エヴァンゲリッシュ・シュティフト)



出典: Googl Earth



1790年から翌年にかけての半年間、シェリングは、ヘルダーリンとヘーゲルと寄宿舎が同室となった。世界の哲学と文学に大きな影響を与えることになる3人が、同時期に同じ部屋で勉強したというのは、世界的な事件であったと言える。ある意味で奇跡のような話である。

シェリングが学んだ神学校は今もテュービンゲンに残っている。テュービンゲンは有名な大学町であり、私のこのシリーズで後で取り上げる予定である。

左上の写真に示すように、テュービンゲンの街の真ん中をネッカー川が流れる。道を少し登ると、この神学校エヴァンゲリッシュ・シュティフト Evangelisches Stift Tübingenがある。右下の写真がこの学校のマークである。

中世の時代に、ここにアウグスティン派の修道院が建てられた。宗教改革の後、1536年に、ヴュルテンベルク公国のウルリヒ公が、プロテスタントの神学校として作り変えた。1589年には天文学者となるケプラーがこの学校に入学した。

左下の写真のイラストのように、この建物は、いくつかの棟からなっている。入口を入ると石畳の中庭がある（右上の写真）。その周囲が回廊になっている。中を自由に見学できる（入場無料）。回廊は2階に登れる。2階にシェリングとヘーゲルとヘルダーリンがいっしょに住んだ部屋がある。

ヘーゲルとヘルダーリンと同室

一人は最も不幸な星のもとに、他の一人は最も幸福な星の下に

3人が住んでいた部屋

シェリング



ヘーゲル



ヘルダーリン



テュービンゲンの神学校エバンゲーリッシュ・シュティフトの2階の回廊のすみに、シェリングとヘーゲルとヘルダーリンがいっしょに住んだ部屋がある。

この部屋の前には、シェリング、ヘーゲル、ヘルダーリンの3人のレリーフがある。この部屋の中は、今は図書室になっているようだ。部屋の中には入ることはできない。

この建物は、全体が博物館のようになっていて、いろいろな展示がある。3人の部屋の反対側には、出身者のケプラーやモリケのレリーフがある。その奥の部屋にも展示がある。

ヘルダーリンとヘーゲルはいずれも1770年生まれであり、シェリングは、彼らより5歳年下であった。ふたりはシェリングより2年早く大学に進んでいた。

ヘルダーリンとシェリングについて、フィッシャー（1901）は次のようにいう。

「その一人は最も不幸な星のもとに、他の一人は最も幸福な星の下に生まれ合わせていた」。

「最も不幸な星のもとに生まれた」というのは、人生半ばで精神の病に冒されたヘルダーリンである。一方、「最も幸福な星のもとに生まれた」のは、23歳で教授となりドイツ哲学を牽引し続けたシェリングである。

◆フィヒテ・シェリング・ヘーゲル テュービンゲン大学

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1788	26	13	18 テュービンゲン大学入学
89	27	14	19
90	28	15 テュービンゲン大学入学 ヘーゲル・ヘルダーリンと同室 ←→	20 シェリング・ヘルダーリンと同室
91	29	16	21
92	30	17	22
93	31 テュービンゲン大学訪問 ←→	18 →	23 テュービンゲン大学卒業
94	32 テュービンゲン大学訪問 シェリングとの文通始まる ←→	19 フィヒテの講演を聴く → フィヒテとの文通始まる	24
95	33	20 テュービンゲン大学卒業	25
96	34	21	26

3人の項目の数字は年齢

3人を結びつけたもの

シェリングとヘーゲルを結んだものは、哲学だった。シェリングは早熟で大学時代から哲学への関心が強かった。シェリングもヘーゲルも、神学の学生として熱心に勉強したが、カントなどの新しい哲学に触れることにより、神学への興味が薄れ、哲学に深く関心をもつようになった。結局、ふたりとも牧師にはならず、哲学の道へ進んだ。シェリングは、テュービンゲン大学を卒業する前から多くの著作を発表し、哲学者として世に出た。年上のヘーゲルはその後に続くことになる。シェリングとの交流はどんどん深まり、後のイェナ大学へと続いていくことになる。

フランス革命とシェリング

もうひとつ、シェリングとヘーゲルとヘルダーリンの3人を結びつけたのは、フランス革命への関心であ

る。

1789年7月14日バスチーユ監獄への襲撃からフランス革命が始まった。シェリングが15歳の時である。

ヴェルテンベルク公国は、ライン河をはさんでフランスと接していた。チュービンゲン大学の学生はフランス革命への関心を強め、神学校には政治クラブができた。

ある日、学生たちはチュービンゲン郊外の野原に出かけ、「自由の樹」を植えた。そして、樹の周りを踊って歌いながら、フランスにならって革命を祝った。この学生たちの中に、シェリング、ヘーゲル、ヘルダリンの3人がいたのである。

しかし、革命はその後、ロベスピエールらのテロ政治へと移行した。この中からナポレオンがあらわれ、ドイツを侵略し、ドイツの大学教員の職を奪うことになった。

フィヒテの自我哲学への傾倒

シェリングが傾倒したのはフィヒテの自我哲学であった。

1793年6月に、フィヒテはチュービンゲンに3日間滞在した。おそらく、ダンツィヒからチューリヒに向かう途中に立ち寄ったと思われる。この時に18歳のシェリングと会ったかどうかは不明であるが、その後、シェリングは、フィヒテが1794年に出版した『知識学の概念について』を読んで、自我哲学に傾倒していた。

1794年5月には、再びフィヒテはチュービンゲンに半日だけ滞在した。当時32歳のフィヒテは、イエナ大学の助教授となっただけであった。この時、フィヒテは19歳のシェリングと会ったようだ。フィヒテが帰ってから、『哲学一般の形式の可能性へ』という論文を書き、9月9日に小冊子として完成し、9月26日にフィヒテに贈った。その後、フィヒテとの間で手紙をやりとりした。

1795年、20歳の大学生だったシェリングは、『哲学の原理としての自我について』を出版した。フィヒテの学説は難解でまだ生成途上にあっただが、シェリングは、フィヒテの学説の要点をすばやく的確に捉えて、この学説を的確に解説してみせたのである。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

この時期のシェリング哲学の特徴は、フィヒテのコピーであった。フィヒテは、「シェリングの本は、私の本の注釈書です」とし、「私の本よりも明快だ」と述べているほどである。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなしていた。

チュービンゲン大学を卒業

1795年に、20歳のシェリングは、シュトールの指導のもとに、卒業論文『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を提出し、合格した。20歳でチュービンゲン大学を卒業したのである。

その後、シュトゥットガルトで神学試験に合格した。しかし、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。

③ライプツィヒ大学で学ぶ 1796～1798年

家庭教師の仕事につく

大学卒業後、1796年、21歳のシェリングは、シュトゥットガルト近郊のアイゼンバッハに住む貴族リーデセル家の家庭教師となった。その後、23歳でイエナ大学の助教授となるまでの3年間は家庭教師をした。当時は、大学の教員になろうとする者は、貴族の家庭教師をしながら、研究をして、大学から招聘されるのを待つという進路をとるのが普通だった。カントは9年間、フィヒテは8年間、ヘーゲルは7年間、家庭教師をした。それに比べたら、わずか3年間の家庭教師をしただけで大学教員となれたシェリングは幸運であった。

さらに幸運だったのは、貴族リーデセル家の2人の子ども（18歳のヘルマンと16歳のヴィルヘルム）がライプツィヒ大学で勉強することになり、シェリングはいっしょにライプツィヒ大学についていき、そこで自分も勉強できたことである。貴族が子どもたちを大学で勉強させるために家庭教師を同伴させ、その家庭教師はその大学で自分の勉強を始めるというのも面白い。

ライプツィヒの町の魅力とライプツィヒ大学については、私の『絵解き地図と写真による大学入門 ライプツィヒ大学を歩いてみよう』を参照いただきたい。 <http://tannoy.sakura.ne.jp/leipzig.pdf>

なぜシェリングは自然哲学に挑んだのか：3つの理論的背景

シェリングはライプツィヒ大学に1796年からほぼ2年間滞在して、医学・物理学・数学などの自然科学の講義を聴いた。当時の自然科学の最先端のライプツィヒ大学で学べたことはシェリングにとってさらなる幸運であった。というのは、それによって自然哲学の体系を生み出すことができたからである。

もともとシェリングには「自然」に対する関心があり、それをライプツィヒ大学の講義が拡大したのである。シェリングが自然に関心をもったきっかけは3つある（藤田、1962）。

①ロマン主義の自然観

啓蒙主義の機械論的・合理主義的自然観に対して、ロマン主義は情緒的・神秘主義的な自然観を特徴とした。自然は「世界霊魂 Weltseele」といった精神の力によって支配されているといった考え方をする。世界霊魂とは、宇宙は全体としてひとつの魂をもつ生き物であり、その魂が宇宙の原理になっているという神秘的・アニミズム的な考えである。

②カントの『判断力批判』

カントは第三批判『判断力批判』において、「生命体」と「美」というものを合目的性という観点から共通に理解しようとした。シェリングの自然哲学はここに理論的基礎をおいている。

③スピノザの客観主義

シェリングはテュービンゲン大学の頃から、オランダの哲学者スピノザ（1632～1677年）の影響を受けていた。スピノザの客観主義の考え方によって、シェリングはフィヒテの主観主義から抜け出すことができたという。

フィヒテを補うはずが破壊した

彼が自然科学を勉強したのは、フィヒテの「知識学」を補うためだった。つまり、フィヒテが扱っていなかった「自然」という領域を扱って、知識学を拡充するためであった。もともとシェリングは、フィヒテを批判する意図はなかった。

しかし、結果的に、自然哲学はフィヒテの立場を壊すことになった。絶対的自我説に自然哲学を組み込むことにより、フィヒテの絶対自我とは違って、汎神論的な絶対自我論となった。フィヒテは「自我」と「自然」とは対立的であると考えていたのに対し、シェリングは、むしろ「自然」は「自我」の根底にあるという汎神論的な立場となった。

「自然哲学の体系は、ついには自我哲学の限界を突き破ってしまう。そこで、シェリングは自然と精神を併置できるようなもっと広範な理論を探さなくてはならなくなった。彼はその基盤を「同一哲学」のうちに見いだした。」（ハルトマン、2004）

自然哲学と自然科学の関係

シェリングの「自然哲学」は、当時の自然科学の実証的研究の成果を取り入れてはいるものの、そもそもは、自然についての形而上学的思弁であり、神秘的・非科学的・魔術的な思弁を含んでいる。シェリングの自然哲学は、現代の自然科学からすればほとんど意義はないのだが、当時の自然科学者にさえにも大きな影響を与えたという。

自然哲学は古代のアリストテレスによって体系化され、中世には、目的論的な自然観（自然は目的をもって作られているという神話的・宗教的・アニミズム的考え方）や、錬金術や占星術のような魔術的な自然観があった。

これに対して、18～19世紀には、ガリレオやニュートンによって自然科学が作られ、機械論的な自然観ができた。すべての自然現象は因果律にしたがっているという考え方である。

当時は有機物の自然科学研究がさかんになっていた。有機物は生命の神秘的な力によって生み出されるという「生氣論」が強く、有機物は人工的には合成することができないと考えられていた。1780年に、スウェーデンのシューレが生物素材から有機化合物を作り出すことに成功し、有機物の研究がさかんになっていた。

シェリングは、こうした自然科学の研究の成果も取り入れて理論化している。

シェリングのライプツィヒ時代から30年後の1828年、ドイツの化学者ヴェーラーが無機物から有機物（尿素）を合成することに成功し、有機物と無機物は本質的に区別のないことを示し、有機物に対するこれまでの神秘性（生氣論）を打破した。これがもとになり、有機化学が発展した。

こうした目的論と機械論という軸で考えると、シェリングの自然哲学は、機械論（自然科学）ではなく、目的論である。これは前述のロマン主義の自然観の影響である。

有機体（生命）について

シェリングは、まず「有機体」（生命）というものを手がかりとして、自然と精神の同一を実証しようとした。

シェリングによると、生命（有機体）というものは、生存するという目的のもとに成り立っている合目的的なものである。つまり、物質が機械的に組みあがってできたものではなく、機械論では説明できない。

また、生命（有機体）というものは、自らを生み出し、自己から生じる（自己複製）。つまり、原因と結果という因果律（機械論）では説明できない。

また、生命（有機体）というものは、外的な物質を取り入れ、それを部分として取り込み生存を続けるが、全体としてひとつの生命なのであって、部分に分けることができない。つまり、全体は部分であって、部分は全体なのであって、全体と部分という区別は意味がない。有機体を構成する物質は、ただ機械論の因果律によって組みあがっているわけではなく、有機体という目的を持ったシステムの中で組み立てられている。

生命（有機体）が発生するのは、「有機的組織化」という力が働くからである。

（現在では、こうした生命的現象を分析する自然科学の方法として「システム論」があるが、当時は、生命現象は自然科学では扱えない神秘的な現象と思われていた。）

そして、生命（有機体）のこのような性質は、「精神」の性質と全く同一である。「精神」も、合目的性を持ち、因果律（機械論）では説明できず、全体的であって部分に分けることができない。精神もまた、「有機的組織化」の原理が働く。

このあたりの論理は、私にはどうもついていけない。論理的にみて、たとえ「生命」と「精神」が似ている点があったとしても、「生命」と「精神」のが同じであるとは言えない。「AならばB、CならばB、よってA=B」は論理的には正しい保証はない。これはフォン・ドマルスがあげた「述語論理の誤謬」すなわち述語の同一によって主語を同一視することの誤りである。フォン・ドマルスは統合失調症者の論理の特徴として、例えば「聖マリアは処女である。私は処女である。だから私は聖マリアである」といった推論をあげた。このような論理は後述の芸術哲学のところでも見られる。

有機体から自然一般への拡大

自然界には物理学レベル（原子・分子）、無機レベル（無機物質）、有機体（生命）レベルといった階層性があるが、シェリングは、有機体（生命）レベルの考察を、物理学レベル（原子・分子）、無機レベル（無機物質）へと拡張する。つまり、生命現象を自然一般へと拡張する。

生命（有機体）が発生するのは、前述のように「有機的組織化」の原理が働くからである。この有機的組織化の力は、有機体だけに当てはまるのではなくて、無機レベルの物質や、その下の原子・分子のレベルにも及ぶ基本的な原理だとする。

物理学レベルには、例えば、電気の正極と負極、磁気のN極とS極、引力と斥力などといった二元性がある。こうした二元性は、根本は同一であり、互いに釣り合っており、分化と統合を表している。こうした二元性は、「有機的組織化」の原理が物質レベルにあらわれたものとする。こうした考えは、当時さかんになった電気や磁気の科学的研究の成果も取り入れている。

こうした二元性は、物理学レベルだけでなく、物質の拡散と凝集といった無機レベル、さらには、生物の両性、精神の主観と客観のように、すべての自然現象に一貫しており、いずれも「有機的組織化」のあらわれだとする。こうした有機的組織化の原理こそ、昔から「世界靈魂 Weltseele」と呼ばれていたものに当たるという。

物質とか無機とか有機体（生命）といった違いは、こうした根本的な原理が、それぞれのレベルで特殊な現れをするだけである。一切の事物の本質は、生命（有機体）であって、物質と生命には根本的な違いはなく、逆に言うと、物質とは生命の消えた段階であると言えるのである。

有機体から「精神」への拡大

こうした有機的組織化の原理というものを、シェリングは「精神」と同一のものとする。前述のように、生命（有機体）の合目的性、非機械論、全体と部分の関係といった性質は、「精神」の性質と全く同一である。精神もまた生命（有機体）と同じく「有機的組織化」の原理が働く。シェリングによると、自然は、無意識的な低次の段階から、しだいに意識的な高次の段階へと至る発展段階をなしている。これは「精神」がより強く反映される過程である。つまり、「精神」というものが自然を生ぜしめる原理となっている。

ここで、シェリングの自然哲学は、フィヒテの自我哲学と結びつく。つまり、こうした「精神」の力こそが、フィヒテのいう「絶対的自我」であるとするのである。精神ないし絶対的自我というものが自然を生ぜしめる原理である。こうして物質から人間の精神に至るまでの全自然界を、精神ないし「絶対的自我」が包括した。これこそ、精神（観念）こそが世界の根底にあるとするドイツ観念論の基本的な主張である。

シェリングは、こうした自然哲学の考えを、『自然哲学への理念』（1797年）や『世界靈魂について』

(1798年) などの著作にまとめた。

シェリングに惚れこんだゲーテ

シェリングの『世界霊魂について』（1798年）は、昔から「世界霊魂 Weltseele」と呼ばれていたものについて、有機的組織化という科学的に見える原理で説明した。この本を読んだゲーテは感心して、ゲーテはシェリングと書簡を交わす仲となる。ゲーテの年譜を見ると「1798年5月末 シェリングとイエナで知り合い、二人で光学実験をする」ともある。

そして、シェリングのタイトルそのままの詩「世界霊 Weltseele」という詩を書いたほどである（1803年）。冒頭の4行を引用する。

世界霊

この聖い宴より

きみたちはあらゆる域へ進みゆけ

歓びに酔い痴れながら 四圍の圏を

突きやぶり 万有をひたし 満たしゆけ

ゲーテ（前田富士男・高橋義人訳）『自然と象徴—自然科学論集』 富山房百科文庫、1982.

この詩の中で、下線の「きみたち」というのは、シェリングとヘーゲルを表すとのことである。

また、ゲーテは、シェリングとヘーゲルを念頭に「一と全 Eins und Alles」という詩も書いている。「一と全」というのは、古代ギリシャの哲学者クセノファネスの言葉で、ギリシャ語のhen kai pan、つまり「一にして全」という意味である。つまり、世界のすべてが神であるという汎神論を示しており、スピノザもよく用いた。スピノザの汎神論の影響を受けたシェリングやヘーゲルは、このhen kai panという言葉をよく用いていた。ゲーテの「一と全」の冒頭の8行を引用する。

一と全

無限のなかにみずからを見出すために

ぼくたちはみな喜んで己を棄てる

するとすべての憂い悩みも消えてゆく

あつい願いや はげしい望み

うるさい頼みや きびしい責務 それよりも

自己放下こそ楽しいことだ

来たれ世界霊よ ぼくたちを満たすため

さあ つぎは世界精神を克ち取ろう

ゲーテ（前田富士男・高橋義人訳）『自然と象徴—自然科学論集』 富山房百科文庫、1982.

この詩の中で、下線の「世界霊」というのは、シェリングの用語であり、「世界精神」はヘーゲルの用語である。

それほどゲーテはシェリングに惚れこんだ。

ゲーテは、当時のワイマール公国の宰相であり、イエナ大学の人事も担当していたので、シェリングをイエナ大学の助教授として呼ぶことにした。シェリングがイエナ大学に就職できたのは、フィヒテの推薦とともに、ゲーテの推薦も大きな力となった。

ゲーテのゆかりの植物園

イエナには植物園があるが、ここには「1817年にゲーテが住んだ」という建物があり、植物園の観察室となっている。この植物園には「ゲーテの銀杏」という木がある。ゲーテはイチョウの木が好きで、ハイデルベルクにも「ゲーテのイチョウ」がある。

ゲーテがシェリングの世界霊の考え方に関心を持ったのは、ゲーテ自身が自然哲学に強い関心を持っていたからである。ゲーテは、色彩、植物形態、地質などの自然現象に強い関心を持ち、独自の自然観察眼から論文を書いた（『自然と象徴—自然科学論集』 富山房百科文庫）。とくに植物形態には関心があり、『植物変態論』（1790年）を著している。

また、科学革命発祥の地パドヴァの植物園には、「ゲーテの棕櫚」という木がある。1786年にここを訪れたゲーテは、この木を見て、「あらゆる植物の形態は、恐らく一つの形態から発達したものであるという」考えを確信するようになったと『イタリア紀行』で述べている。帰国してから、1790年にゲーテは『植物変態論』という本を書いて、この考えをまとめた。これについては、私の著書『イタリア・アカデミックな歩き方』（有斐閣）の第6章パドヴァを参照いただきたい。

④イェナ大学助教授 1798～1803年

フィヒテに呼ばれてイェナ大学の助教授になる

シェリングは、1795～1801年に次々と5冊の哲学的著作を発表し、哲学者として頭角をあらわした。

このシェリングを、フィヒテは自分の後継者とみなして、イェナ大学に呼んだ。

また、シェリングの『世界霊魂について』を読んだゲーテが感心し、彼を推薦した。

当時のイェナ大学には哲学の教員がたくさんおり、教授3名、助教授（員外教授）2名、私講師7名という構成だった。1798年、23歳のシェリングは助教授（員外教授）として講義を始めた。最初はフィヒテとともに講義をした。「自然哲学」と「超越論的観念論」という2つの授業を持った。フィヒテの受講者は290～400名だったのに対し、シェリングの受講者は40名だったという。

文化の中心都市イェナ

イェナという街は、日本人にはあまりなじみがないが、ドイツでは大学町として有名である。イェナの街には「哲学者の道 Philosophenweg」がある。哲学者の道といえば、ハイデルベルクや京都が有名だが、イェナも有名である。イェナ大学は、ドイツ観念論哲学のビッグスリー（フィヒテ・シェリング・ヘーゲル）をはじめ、シュライアマハー、シュレーゲル兄弟、フリースなど、多くの哲学者を輩出した。当時の文化の中心都市であった。

昔のイェナ大学の様子は、左上の版画と左下の模型に示されている。建物の正面に塔が立っていて、特徴的なトンガリ屋根がついている。

右上は、現代のイェナ大学の本部である。建物の中央に時計台が立っている。

右下は中庭の写真であるが、昔の塔のトンガリ屋根が保存されている。

ドイツ観念論哲学のイェナ大学の人間ドラマの影の仕掛け人はゲーテ

この頃のイェナ大学は、ゲーテの政策によって、ドイツを代表する学者たちが教授として招かれていた。ゲーテは、当時のワイマール公国の宰相であり、イェナ大学の人事も担当していたのである。

後述のように、フィヒテやシュレーゲル（兄）をイェナに呼んだのもゲーテである。シェリングの著書『世界霊魂』に惚れこんで、彼をイェナ大学助教授に呼んだのもゲーテである。また、イェナ大学の私講師だったヘーゲルが助教授に昇格したのもゲーテの力添えがあったからである。ドイツ観念論の哲学のビッグ3がイェナ大学に来たのは、ゲーテと関わりがある。この3人はイェナ大学で泥沼の人間ドラマを展開するのだが、その影の仕掛け人はゲーテであるといっても良いだろう。

いっちょかみゲーテ

それだけではない。ゲーテは、無神論論争でフィヒテをイェナから追い出すことにも関わった。

また、シュレーゲル（兄）と妻カロリーネの離婚に力添えしたのもゲーテであり、それによってシェリングはカロリーネと結婚できた。カロリーネが病死したあと、シェリングの妻となったパウリーネは、ゲーテの友人の娘であり、ゲーテが紹介したとも言われる。

ゲーテはあらゆる人間関係に顔を出す。彼はいつも誰にでも口を出すいっちょかみである。

ゲーテとロマン主義運動

ワイマールの宰相であったゲーテが、ドイツを代表する学者たちが教授として招いたことにより、この頃のイェナはドイツの学芸の中心地となった。

中でも、「ロマン主義」と呼ばれる美学運動がおこり、『アテネウム』という機関誌が発行された。ロマン主義の中心となったのは、シュレーゲル兄弟、ティーク、ノヴァーリス、シュライアマハーなどであり、シェリングもこのサークルの理論的指導者となった。彼らは、ゲーテの作品や疾風怒濤期の作品から影響を受けて、主観性や感受性を重視し、それまでの理性偏重、合理主義に反対した。

こうしたイェナの雰囲気から、後にこの都市でブルシェンシャフト運動がおこる。

フィヒテ→シェリング→ヘーゲルの悪の連鎖



◆イエナ大学 フィヒテ→シェリング→ヘーゲルのバトンタッチ

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1794	イエナ大学助教授		
95			
96			
97			
98	無神論論争	10月イエナ大学助教授	
99	7月ベルリンへ		
1800		(バンベルクで医学研修)	
01			8月イエナ大学私講師
02			シェリングに同調しフィヒテを批判 「哲学批判雑誌」
03		ヴェルツブルク大学へ	
04			
05			イエナ大学助教授
06		ミュンヘンへ	
07			イエナを去り、バンベルクへ 『精神現象学』でシェリング批判

→ は協調 ← は批判

イエナ大学は、ドイツ観念論哲学のビッグ3であるフィヒテ・シェリング・ヘーゲルが教員をつとめた。イエナ大学での3人の関係はよく知られており、哲学の教科書にも出てくる。それは決して師弟愛のようなきれいな事ではなく、打算と裏切りにまみれた攻撃感情むき出しのドロドロした人間ドラマであった。哲学史で最も面白い人間ドラマといっても過言ではない。しかも、3人がイエナ大学に在席した13年間でドイツ観念論哲学を完成させ、哲学の歴史を大きく変えることになる。

3人の関係を示したのが下の表である。色を塗ったところがイエナにいた時期である。以下、年代を追って見ていこう。

◆イエナ大学のフィヒテ・シェリング・ヘーゲルのバトル

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1794	32 イエナ大学助教授		
95	33		
96	34		
97	35		
98	36 無神論論争	23 イエナ大学助教授	
99	37 イエナ大学を去る	24	
1800		25	
01		26	31 イエナ大学私講師
02		27	32 「哲学批判雑誌」
03		28 イエナ大学を去る	33
04			34
05			35 イエナ大学助教授
06			36
07			37 イエナを去る 『精神現象学』でシェリング批判

↔ は協調 ← は批判 3人の項目の数字は年齢

シェリングとフィヒテが対立しはじめる

はじめはフィヒテを補うための自然哲学だったのだが、突き詰めてみると、全く違う立場に導かれてしまったのである。それでもシェリングは、ずいぶんと長い間、フィヒテを否定するものだとは思っていなかったという。

フィヒテが1799年に無神論論争でイエナを去ると、シェリングは、手のひらを返したように、フィヒテに冷たくするようになった。

1800年、新しい雑誌の構想をめぐり、シェリングと異なる見解を持った。

哲学上の考え方においても、ふたりの立場の違いが意識されるようになった。シェリングは、1800年に『超越論的観念論の体系』を発表し、自然哲学と超越論的哲学を対等に扱った。もともとフィヒテはシェリ

ングの自然哲学に好意を持っていなかったもので、この著書を読んだフィヒテは、シェリングが自我哲学を逸脱していると感じた。そこで、すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと批判した。しかし、説得はうまくいかなかった。文通が続くが、はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていたが、しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。この往復書簡によって、2人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。

シェリングは1801年に『わが哲学体系の叙述』を発表した。この著作こそが、シェリングが同一哲学を打ち立てた記念碑的な著作とされる。これに対して、フィヒテは、シャート宛の手紙でシェリングを批判した。また、フィヒテは、1801年にベルリンでの私的講義をもとに『知識学の叙述』を書き、シェリングとの差が明確になった。

シェリングはヘーゲルをイエナに呼んで援護させた

フィヒテとシェリングが対立しはじめた1801年に、ヘーゲルがイエナ大学にやってきた。シェリングが、フィヒテとの対立の応援をさせるために、ヘーゲルを呼んだのである。

ヘーゲルは論文を発表していたわけではないし、大学教員としての経験もなかった。そんな若者がすぐに大学教員になれるわけではない。そこで頼った友人がシェリングであった。当時シェリングは、23歳でイエナ大学の助教授となっていた。そのシェリングのコネを利用して、イエナ大学にもぐりこもうとした。

1801年に、イエナに来たその年に、ヘーゲルは論文を書いて教授資格を取った。ヘーゲルの教授資格論文は『遊星の軌道についての哲学的論文』というものである（邦訳：ヘーゲル『惑星軌道論』村上恭一訳、法政大学出版局 叢書ユニベルシタス、1991）。これは自然科学の論文ではなく、天文学に材料を取った形而上論文だという。ピタゴラスのような数の神秘主義にもとづいて、火星と木星の間には惑星は存在しないと予言したものである。

研究業績のないヘーゲルに教授資格を取ることを勧めたのはシェリングだったであろう。そもそも、ヘーゲルは自然哲学にはあまり興味がない。当時、自然哲学で売り出していたのはシェリングであった。ヘーゲルに「遊星の軌道」についての論文を書かせたのはシェリングかもしれない。ひょっとすると、論文のネタを与えたのはシェリングだったかもしれない。だとすれば、シェリングはよほどヘーゲルを大学のポストにつかせたかったということになる。

実際、1801年の秋に、無名だったヘーゲルは、イエナ大学の私講師となることができた。これは幸運であったが、やはり当時助教授だったシェリングの強い推薦があったことは間違いがないだろう。

ただ、私講師（無俸給教師）とは、大学からの給料が出るのではなく、学生の聴講料だけから収入を得る不安定な身分である。学生からの人気があれば収入はゼロである。当時のイエナ大学には哲学の教員がたくさんおり、教授3名、助教授（員外教授）2名、私講師7名という構成だった。学生は30名ほどであり、私講師は聴講生を奪い合った。ヘーゲルはかなりお金に困ったようだ。

ヘーゲルが担当したのは論理学、形而上学、自然法、数学などであった。1801～1803年の間は、シェリングといっしょに教えていて、はじめは「哲学演習」もシェリングと共同でおこなった。これもシェリングがいかにヘーゲルに思い入れていたかを示すエピソードである。

シェリングとヘーゲルが組んでフィヒテを批判

ヘーゲルがイエナで最初にしたことは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングに味方することであった。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。

1802年に、シェリングとヘーゲルは「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。ヘーゲルはここに5本の論文を発表し、ここから学問的活動を始めた。この雑誌はフィヒテを批判したもので、フィヒテに送りつけられた。もちろん、シェリングにとっても、自説を肯定してくれるヘーゲルの存在は快かつたであろうが、徳をしたのは、すでに有名だったシェリングよりも、無名だったヘーゲルのほうである。

シェリングはフィヒテと決別 2人の交流は終わった

1802年1月のシェリングからの手紙で、ふたりの文通は終わった。フィヒテとシェリングは絶交した。

シェリングは、1802年の対話篇『ブルーノ』などの著作において、暗にフィヒテを批判した。

1806年に、ミュンヘンにいたシェリングは、「改良されたフィヒテの学説に関する自然哲学の真の関係の明示」を発表して、名指しでフィヒテを批判した、

それに反論するために、フィヒテも、1806年に「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いて、シェリングを批判したが、生前は未発表に終わった。

1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

シェリングがフィヒテに与えた影響

ただし、フィヒテは、シェリングを一方向的に批判するだけではなかった。フィヒテは、ベルリンでの後期思想では、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考え方を変えていくが、そうした変化をもたらした要因

のひとつは、弟子のシェリングの絶対者の哲学だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたが、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。

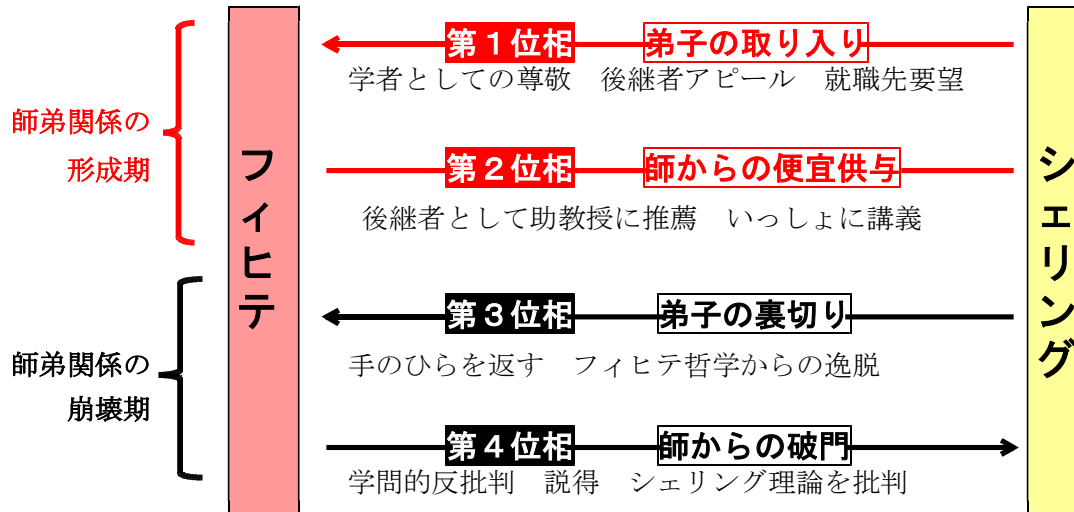
フィヒテは、弟子シェリングの裏切りにあって、シェリングを批判したが、それだけではなく、シェリングの問題提起を受け入れた。これは、のちにシェリングが、弟子のヘーゲルから批判を受け、ヘーゲルの死後もヘーゲルを徹底的に批判し続けたのとは、違っている。3人の行動としては例外的である。

フィヒテとシェリングの師弟関係

ここでフィヒテとシェリングの師弟関係についてまとめておこう。

師弟関係は、形成期と崩壊期に分けられる。それらは、それぞれ、弟子から師への働きかけと、師から弟子への働きかけに分けられる。そこで、全体として4つの位相に分けられる。第1位相は「弟子から師への取り入り」であり、第2位相は「師からの便宜供与」、第3位相は「弟子による師への裏切り」、第4位相は「師から弟子への破門」である。

図 フィヒテとシェリングの師弟関係



第1位相 弟子の師への取り入り（シェリング→フィヒテ）

その始まりは、1794年、シェリングが、チュービンゲン大学において、フィヒテの講演を聴いたことにある。19歳のシェリングは、フィヒテの講演を聴き、著作を読んで感動し、「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。学者としての尊敬を示し、フィヒテ理論を支持し、フィヒテの後継者たることをアピールした。ちょうど、4年前の1791年、29歳のフィヒテがカントに対しておこなったのと同じアピールを、今度はフィヒテがシェリングから受けたわけである。また、著書『哲学の原理としての自我について』を出版し、フィヒテの学説を的確に解説し、フィヒテの後継者たることをアピールした。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

シェリングは、家庭教師をしながら大学の教員となることを望んでいた。イエナ大学のフィヒテから呼ばれたが、もし呼ばれなくても、シェリングは他の大学にいくらでも就職できただろう。シェリングはプライドが高く、フィヒテと対等に振る舞ったようだ。

第2位相 師から弟子への便宜供与（フィヒテ→シェリング）

フィヒテは、シェリングの著書を読んで、「シェリングの本は、私の本の注釈書です。私の本よりも明快だ」と述べている。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなした。フィヒテはシェリングに手紙を書いて指導し、2人の間に長期間の往復書簡が始まった。フィヒテは、はじめ、シェリングと協力して、カント哲学の不統一を補おうという目論見もあったかもしれない（ちょうど、のちにシェリングがヘーゲルと組んでフィヒテ哲学を乗り越えようとしたように）。

フィヒテは、シェリングから尊敬を受けたことを喜び、シェリングに対していろいろな援助を与えた。シェリングを後継者とみなして、イエナ大学の助教授として呼んだ。フィヒテの時と同じく、ゲーテの推薦もあった。フィヒテは、はじめシェリングといっしょに講義もおこなったほどである。イエナ大学に就職した時点での哲学上の業績は、23歳のシェリングのほうが、32歳のフィヒテよりも圧倒的に上であった。他の大学から声がかかることも予想され、シェリングを後継者として「青田買い」しておきたいというフィヒテの心理もあったかもしれない。ただ、23歳で大学助教授として呼ばれたシェリングの利益も大きく、得た利益は五分五分だったといえるだろう。別の言い方をすれば、相互の打算のうえに成り立っていた。

第3位相 弟子の裏切り（シェリング→フィヒテ）

しかし、フィヒテがイエナを出ると、2人の関係は冷めたものになる。

シェリングは、フィヒテの自我哲学から独立しはじめた。①自然哲学、②汎神論、③自我哲学と自然哲学の同等性、④絶対者の哲学へ、⑤美的観念論という発展を辿って、⑥同一哲学を完成させたのである。師の自我哲学から始まって、師のフィヒテとは違った結論に達した。単純化すると、フィヒテが「自我がすべてである」としたのに対して、シェリングは「すべてが自我である」と主張するようになった。1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。フィヒテの倫理的観念論に対して、シェリングは美的観念論と呼ばれる。

シェリングは、フィヒテがイエナから去ると、手のひらを返すように、フィヒテに冷たくなった。イエナ大学の教員になるという目的を果たしてしまえば、フィヒテに媚びる必要もなくなった。さらに、師を批判するようになった。ふたりの文通は1801年をもって終わった。シェリングは、対話篇『ブルーノ』（1802年）などの著作で暗にフィヒテを批判した。そして、1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。恩を裏切った。こうした過程も、フィヒテとカントの関係と同じである。

シェリングの戦略として特徴的なのは、彼がヘーゲルを援軍としてイエナ大学に呼び、2人でタッグを組んで、フィヒテと戦ったことである。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。これは3人の間のバトルにおいて特徴的であり、学問的な批判が攻撃であることを示すエピソードでもある。

第4位相 師からの破門（フィヒテ→シェリング）

フィヒテは、シェリングの1800年の『超越論的観念論の体系』を読み、シェリングが自我哲学を逸脱していると感じた。そこで、すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと批判した。しかし、この往復書簡によって、2人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。1801年のシェリングの『わが哲学体系の叙述』に対して、フィヒテは、シャート宛の手紙でシェリングを批判した。また、フィヒテは、1801年にベルリンでの私的講義をもとに『知識学の叙述』を書き、シェリングとの差が明確になった。シェリングは、1802年の対話篇『ブルーノ』などの著作において、暗にフィヒテを批判した。シェリングは、1806年に「改良されたフィヒテの学説に関する自然哲学の真の関係の明示」を発表して、名指しでフィヒテを批判した。それに反論するために、フィヒテも、1806年に「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いて、シェリングを批判したが、生前は未発表に終わった。

ただし、フィヒテは、シェリングを一方向的に批判するだけではなかった。フィヒテは、ベルリンでの後期思想では、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考え方を変えていくが、そうした変化をもたらした要因のひとつは、弟子のシェリングの絶対者の哲学だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたが、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。これは、のちにシェリングが、弟子のヘーゲルから批判を受け、ヘーゲルの死後もヘーゲルを徹底的に批判し続けたのとは違っている。3人の行動としては例外的である。

フィヒテはシェリングの『超越論的観念論の体系』を読んで、飼い犬に手をかまれたという反感を持った。始めは手紙で説得しようとしたが、うまくいかなかった。はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていたが、しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。互いの理論を批判する戦いが続いた。1802年1月のシェリングからの手紙で、ふたりの文通は終わった。フィヒテが弟子のシェリングを破門したことになる。ふたりは絶交し、以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

こうして、フィヒテとシェリングの師弟関係は崩れたのであるが、前述のカントとフィヒテの関係と同じである。ただし、フィヒテとシェリングは同じイエナ大学の同僚なので、余計にドロドロとしたものを感じられるようになった。

1803年 シェリングがイエナを出る

1803年にシェリングがイエナを去った。後述のように、フィヒテはシュレーゲル（兄）の妻カロリーネと恋愛し、ふたりを離婚に追い込んだ。このスキャンダルにより、シェリングはヴェルツブルク大学へと去った。

ヘーゲルがシェリング批判をはじめた

ヘーゲルはもともとカロリーネをよく思わなかったという。そして、1805年にヘーゲルはイエナ大学の助教授となった。もうシェリングに頼る必要はない。こうして、手のひらを返したように、ヘーゲルはシェリングを批判するようになった。

ヘーゲルがイエナ大学の教員となれたのはシェリングのコネのおかげであり、シェリングは恩人であったが、その数年後にヘーゲルは一方的にシェリングを批判した。

無名のヘーゲルがイエナへ行ったときは、哲学教授シェリングのゴマをすり、その力を借りて、イエナ大学にもぐりこもうとした。シェリングを踏み台にして出世しようとする打算的な行為である。とはいえ、ヘーゲルは自分のことを「シェリングの弟子」と呼んでいた時期もあり、当時は本当にシェリングを尊敬していたのかもしれない。

後述のように、すでにフランクフルト時代には、ヘーゲルの内心ではシェリング哲学を乗り越えていた。したがって、イエナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。何しろヘーゲルはシェリングより5歳年上である。年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。

ヘーゲルがシェリングを批判した

1807年に発表した『精神現象学』の序文において、ヘーゲルはシェリングの同一哲学を批判した。ヘーゲルは、『精神現象学』の序文に、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはずべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。

ヘーゲルは平然とシェリングにこの本を送った。シェリングはこの本の序文を読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。彼は序文だけしか読まなかった（といっても、シェリングだけのことではなく、『精神現象学』は難解すぎて、専門家ですら序文から先に進んだ人はほとんどいないという）。

シェリングとヘーゲルの交流は終わった

半年後に、シェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって2人の友情は終わった。一方のヘーゲルは、シェリングを傷つけるなどとは夢にも思わなかったという。

2人はのちに2回出会った。1812年にニュルンベルクで、1829年にカルルスバートで、ヘーゲルは師シェリングと偶然に出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。

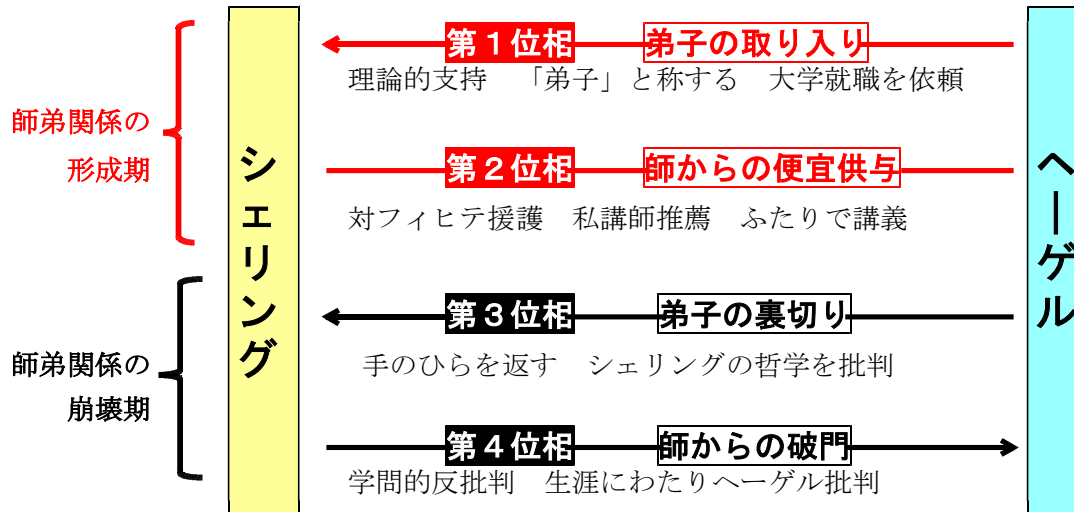
シェリングも、後述のように、一生ヘーゲルを恨んだ。シェリングは、ヘーゲルからの批判によって挫けてしまったわけではなく、逆にヘーゲルの批判に対して反批判をおこなうことによって、独自の後期思想を作っていた。

シェリングとヘーゲルの師弟関係

シェリングとヘーゲルの師弟関係についてまとめておこう。

シェリングとヘーゲルは、テュービンゲン大学の寄宿舎で同室になったことで知り合った。シェリング15歳、ヘーゲル20歳の時である。シェリングは5歳も年下であったが、もともとは同級生として平等の関係であった。しかし、1798年、23歳のシェリングはイエナ大学の助教授となり、そこから、年上のヘーゲルが、年下のシェリングの弟子となるという関係となった。

図 シェリングとヘーゲルの師弟関係



第1位相 弟子の師への取り入り（ヘーゲル→シェリング）

ヘーゲルは、テュービンゲン大学で同級だった時から、早熟のシェリングの哲学の才能を尊敬していた。ヘーゲルは、5歳も年下のシェリングに対して、みずからを「シェリングの弟子」と呼んでいた。シェリングに呼ばれてイエナに行ったヘーゲルは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングを支持した。

ヘーゲルは、イエナ大学に来る前は、フランクフルトで家庭教師をしていた。1799年、父の遺産を相続したヘーゲルは、哲学で身を立てようとしたが、哲学の業績があるわけでもなく、大学のコネがあるわけでもなかった。ヘーゲルにとって、昔の同級生シェリングのコネだけが頼りだった。ヘーゲルは、大学への就職を依頼する手紙をシェリングに書いた。29歳のヘーゲルのほうから、24歳のシェリングに強くアピールしたのである。ヘーゲルは、3人のうちで就職の打算が最も強かっただろう。みずからを「シェリングの弟子」と呼んだのは、別の面から見ると、無名のヘーゲルが、助教授シェリングに取り入ってゴマをすり、その力を借りて、イエナ大学に就職したいという打算からだった。その作戦は見事にうまくいった。

第2位相 師からの便宜供与（シェリング→ヘーゲル）

シェリングは、ヘーゲルとともに「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。このように、シェリングは、ヘーゲルを弟子として指導した。

シェリングは、年上のヘーゲルから「シェリングの弟子」と呼ばれて喜んだだろう。シェリングはヘーゲルに対してきわめて多大な援助を与えた。ヘーゲルに教授資格を取らせ、イエナ大学の私講師のポストにつけた。ほかに、①前述の雑誌「哲学批判雑誌」に5本の論文を発表し、ヘーゲルは研究業績を作ることができた。②イエナ大学でシェリングと共同で演習を出させてもらった（無名だったヘーゲルがイエナ大学で聴講学生を集めることができたのはシェリングのおかげである）。③ヘーゲルをイエナの学芸サークルに紹介した。④ヘーゲルは後に、ゲーテの推薦によって哲学科の助教授に昇進したが、ゲーテにヘーゲルを紹介したのはシェリングであった。⑤イエナに来たばかりの時は、シェリングは家にヘーゲルを同居させた。客観的にみても、シェリングはまさに恩人であった。

このようなヘーゲルに対する援助の裏には、シェリングの目的があった。当時、シェリングはフィヒテからの理論的な独立を遂げようとしており、その援護を必要としていた。そこで、対フィヒテ援護のために、イエナ大学に来ることを勧めた。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。ヘーゲルから理論的支持を得て、いっしょにフィヒテを批判してくれることはありがたいことだっただろう。シェリングとヘーゲルの連携は成功した。

このように、シェリングとヘーゲルの利益は双方向的であるが、より多くの利益を得たのはヘーゲルのほうであろう。それまで全く哲学の業績もなく、大学での教職経験がなく、コネもなかったヘーゲルが、イエナ大学に就職することができたのは、全くシェリングのおかげである。

第3位相 弟子の裏切り（ヘーゲル→シェリング）

ところが、シェリングがイエナ大学をやめて外に出ると、2人の関係は冷めたものになる。フィヒテ・シェリング関係と同じことが繰り返された。

ヘーゲルは、イエナの前のフランクフルト時代にはすでに、フィヒテやシェリングの自我哲学を乗り越えていたとされる。シェリングは、神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在するという汎神論の立場である。シェリングの同一哲学では、神はあらゆるものの根底に存在し、神は常に変化せずに、自己同一的に存在する。ヘーゲルは、はじめシェリングの影響を受けて、シェリングの汎神論の立場に同調していた。しかし、フランクフルト時代のヘーゲルは、「歴史の目的論的解釈」を考えるようになった。これは、歴史とは「神」という絶対者がその本質をしだいに実現する過程であるとするものである。つまり、神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せずに自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。シェリングのいうように、もしすべてのものが神であれば、他と差別がなくなり、善悪真偽の区別もなくなり、価値の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。そして、絶対者から有限者が差別化して現れることを説明できない。1807年に発表した『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはすべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。絶対者から有限者が現れることを説明できないという批判である。この『精神現象学』こそヘーゲルの前期の主著とされるのである。

ヘーゲルも、シェリングがイエナから去ると、手のひらを返して、シェリングに冷たくなった。イエナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。それに、5歳年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。また、シェリングの愛人となったカロリーネに対して、ヘーゲルはよく思っていなかったという。

そして、ヘーゲルはシェリング哲学に対して、遠慮のない批判を加えるようになった。ヘーゲルは『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、シェリングを罵倒した。ヘーゲルは平然とシェリングにこの本を送った。前述のように、イエナ大学に来たばかりのヘーゲルに数々の便宜をはかり多大な援助を与えたシェリングは、ヘーゲルにとって恩人のはずである。ヘーゲルに大学教授資格を取らせて大学の私講師にしたのもシェリングだし、いっしょの家に住ませたのもシェリングである。そうした恩を全く忘れたかのようなヘーゲルの裏切りの態度は理解に苦しむところである。まるで、シェリングの数々の便宜供与は、まるでシェリングの一人相撲であったとでもいわんばかりである。

しかも、前述のように、ヘーゲルは、イエナに来る前から、すでに内心ではシェリングを支持していなかったようだ。カントをフィヒテが乗り越える過程や、フィヒテをシェリングが乗り越える過程は、最初からそうだったわけではなく、しだいに理論が変化することによって徐々に乗り越えていったのである。ところが、ヘーゲルがシェリングを乗り越える過程は、実はイエナの前の時代に終わっていた。つまり、大学のポストを得るという打算のために、シェリングを支持するフリをしていたことになる。そもそもシェリングを師として尊敬しなかったと考えると、シェリングがイエナを去って、ヘーゲルがシェリングに冷たくなり、裏切ったのも当然のことかもしれない。まさに打算と裏切りの過程である。もしそうなら、ヘーゲルは、3人のうちで最も悪質であるともいえるかもしれない。

第4位相 師からの破門（シェリング→ヘーゲル）

シェリングは、ヘーゲルの1807年の『精神現象学』において罵倒されたが、それに対する反批判を公けにしたのは、ヘーゲルの死後、1834年のことである。シェリングは、クーザンの著書に序文を寄せて、次のようにヘーゲルを批判した。「ヘーゲルの哲学は、シェリングの同一哲学を完成したものではありません。これを一步も前進させたわけではない。同一哲学によっては、あるものが何であるかということは説明できても、それが現にあるということは捉えられない。「現実存在」は「本質」に解消されるものではなくて、これに積極的に加わるものである。この積極的なものを問題にすることを標榜して、彼は後期の哲学を「積極哲学」と呼び、考えられぬものではないというだけの消極的本質を扱った前期の哲学を「消極哲学」と呼んで、両者をはっきり区別する。もちろん消極哲学そのものを無意味というのではない。しかし、ヘーゲルのように、論理的、観念的な限定をそのまま実在的な運動と主張するのは、明白な誤りである」（服部・井上、1955）『ブルーノ』記者解説

1841年、シェリングはベルリン大学教授として呼ばれたが、シェリングは、ヘーゲル哲学を徹底的に批判した。ヘーゲルは、理性や概念にもとづいて存在を把握しようとしたために、存在を本質としてしか把握できない「消極哲学」にすぎない。存在を存在そのものとして、「現実存在」としてとらえる「積極哲学」を主張し、人々を動かした。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。ヘーゲルへの反批判がシェリングの後期哲学を生むことになった。

「本来ヘーゲルが前期のシェリング哲学に対する批判を基として新しい立場を開いたのに対し、今度は逆にシェリングがヘーゲル哲学を批判することによって、従来のシェリング哲学とは違った新しい立場を拓いた」 藤田（1962）

シェリングは、ヘーゲルが1807年の『精神現象学』においてシェリングを罵倒しているのを読んで、目を疑った。飼犬に手を咬まれるようなショックだったろう。すぐにシェリングはヘーゲルに不満の手紙を書

き、それによって2人の師弟関係は終わった。実質上の破門であり、絶交を言い渡したことになる。シェリングは一生ヘーゲルを恨んだ。しかも、1816年には屈辱が待っていた。1814年にベルリン大学の哲学教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のはままだった。1816年に後任として、3人の候補があげられた。シェリング、ヘーゲル、フリースの3人である。投票の結果、選ばれたのはヘーゲルであった。シェリングはヘーゲルに敗北を喫した。これは屈辱であったらう。

1818年、ヘーゲルはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなしていった。これに対して、シェリングは、ミュンヘンにおいて、すっかり栄光から遠のき、今をときめくベルリンのヘーゲルを羨望の目で眺めつつ、落魄の日々を送ることになった。ヘーゲルよりも先に哲学界にデビューしフィヒテ以上の時代の寵児となった自分が、20年後にはすっかり栄光から遠のき、ヘーゲルに水をあけられてしまった。ミュンヘンに移ったシェリングのもとをハイネが尋ねた。その時に、シェリングは「ヘーゲルはわしのアイディアを奪い取った」とぐちったという（バウムカルトナー『シェリング哲学入門』）。

シェリングとヘーゲルは絶交後、2回だけ偶然出会う機会があった。1812年にニュルンベルクで、1829年にカルルスバートで、ヘーゲルは師シェリングと偶然に出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。

1831年、ヘーゲルが亡くなった。シェリングはずくにはヘーゲル批判を公にはしなかったが、3年後の1834年、クーザンの著書に序文を寄せて、ひそかにヘーゲルを批判した。

1841年、シェリングは、ヘーゲル哲学の牙城のベルリン大学に呼ばれたが、そこでもヘーゲル哲学を徹底的に批判し続けた。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない（私の哲学を盗んだもの）」と考えていた。学問の装いをとっているものの、シェリングの積極哲学の底には、ヘーゲルに対する恨みがあると思われる。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。

こうして、シェリングとヘーゲルの師弟関係は崩れた。カント→フィヒテ→シェリング→ヘーゲルという関係は、いずれも同じような形をとったことは興味深いことである。打算と裏切りの関係は連鎖したのである。

シェリング哲学の発展段階

以下、シェリングの哲学の展開についてみていこう。シェリングの前期哲学は、7つの段階に分けることができる。

シェリングの前期哲学の展開	
第1段階	フィヒテの自我哲学
第2段階	自然哲学
第3段階	汎神論
第4段階	自我哲学と自然哲学の同等性
第5段階	絶対者の哲学へ
第6段階	美的観念論
第7段階	同一哲学

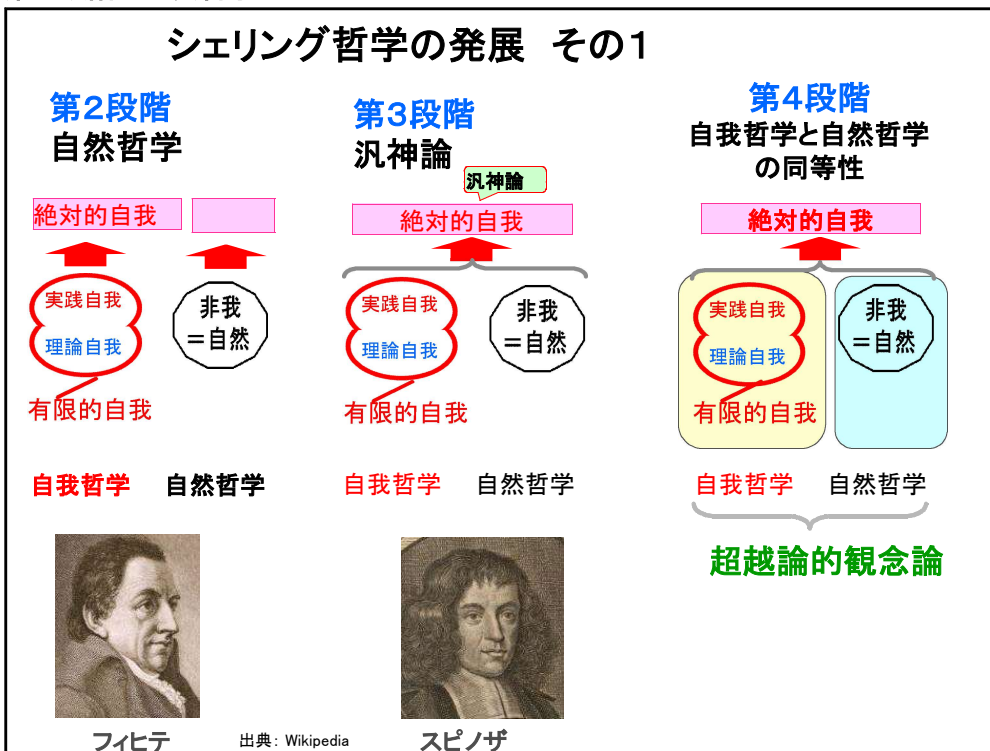
第1段階 フィヒテの自我哲学を受け継ぐ

シェリングの第1段階は、フィヒテの自我哲学である。

前述のように、カントの「実践理性」と「理論理性」とを統一的に理解するために、フィヒテは「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。大元は能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が現れる。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。

初期のシェリングは、フィヒテの自我哲学をそのまま取り入れた。フィヒテの絶対的自我・実践自我・理論自我・非我といった用語と体系は、そのままシェリングにも受け継がれている。

第2段階 自然哲学



シェリングは、「自然哲学」を入れることで、フィヒテから独立の一步を踏み出し、最終的に「同一哲学」で完成を迎えた。以下では、岩崎（1967）にもとづいて、それぞれの段階を追っていく。

第2段階は「自然哲学」である。最初にシェリングが自然哲学に踏み込んだのは、フィヒテを乗り越えようとしたためではなく、むしろフィヒテを補うためであった。つまり、自我哲学は「純粋理論哲学」であり、自然哲学は「応用理論哲学」という位置づけだった。

フィヒテの哲学には、「自然」についての考察がない。そもそもフィヒテの哲学に「自然哲学」が入ることはありえない。図に示すように、フィヒテの「絶対的自我」は、われわれの有機的自我の根底にあり（図では有機的自我の上に絶対的自我と書いてあるが、これは「根底にある」という意味である）、絶対的自我と有機的自我の対極にあるのが「非我」である。「自然」とは、フィヒテにおいては、認識の対象となる自然である。自然とは「非我」のことであり、非我は自我を阻害するものである。非我についての自我哲学などということとはあり得ない。フィヒテにとっては、「自然」などはどうでもよいのである。

シェリングは、ライプツィヒ大学で自然哲学の体系を作りながら、フィヒテに欠けている自然について考

察した。シェリングにとっても、自然とは、始めは「非我」のことであった。しかし、そのうちに、非我＝自然は、単なる機械的・無機的なものではなく、精神の力が働いていると考えた。絶対的自我は、人間の自我の働きの究極であるが、非我＝自然にも同じように究極のものに向かって動いている。自我における「絶対的自我」と、非我＝自然における「絶対者」とが重なった。これを「絶対的自我」と呼んだのである。自然哲学を進めるうちに、自然とは、絶対者（神）がみずからの目的を実現していく過程であると考えた。

このように、シェリングは、フィヒテの領域を自然へと広げて、自我哲学を拡大・補強しようとしたのである。

第3段階 汎神論

第3段階は汎神論である。

絶対的自我は、自我と非我の両方の根底に存在するものとなった。つまり、絶対的自我（絶対者＝神）は、世界にあまねく広がっている。ここには、オランダの哲学者スピノザ（1632～1677年）の汎神論の影響が大きい。シェリングは新スピノザ主義と言われる。

汎神論と有神論の対立軸でいうと、キリスト教のような有神論（とくに一神論）は、世界を創造し支配する人格的な神を主張する。フィヒテの倫理的観念論（有限的自我の根底にある「絶対的自我」を理想として行為すべきという考え方）は、神を人格的に捉えているので、キリスト教的な一神論の考え方である。

これに対して、シェリングの自然哲学は、一切のものに神性があるとする汎神論であり、自我にも非我にも神が宿っている。シェリングは、明らかにフィヒテの一神論的な考え方とは違っており、キリスト教からすると異端的な考え方なのかもしれない。

フィヒテの絶対的自我は、もともとは自我の底にある統覚のことであり、あくまで人間についての哲学であった。これに対し、シェリングは、人間も自然もひっくりめた宇宙全体についての哲学となった。

このような汎神論的な考え方は、後にヘーゲルにも受け継がれる。

汎神論的自我哲学によってシェリングの哲学はこんなに変わった

自然哲学を組み込んだ意味はとても大きい。それによって、シェリングの哲学は大きく変わった。

第1に、絶対的自我は、有機的自我の根底に存するだけでなく、「非我」の根底にも存することになる。絶対的自我は、自我と非我の両方の根底に存在するものとなった。自我の根底に「絶対的自我」があると同時に、「非我」の根底にも「絶対的自我＝神」がある。

簡単にいうと、フィヒテが「自我がすべてである」とし、スピノザが「世界がすべてである」としたのに対して、シェリングは「すべてが自我である」と主張した（シェリング『わが哲学体系の叙述』）。

第2に、非我の位置づけが変わった。フィヒテでは、非我は、自我と対立関係にあり、自我を阻害するだけのものではあった。それでも自我は非我の阻害を乗り越えようとする。これに対して、シェリングでは自我と非我は、同じ絶対者の元では、同列のものとなった。自我と「非我＝自然」とは、対立するものではなく、その根底に「神（絶対者）」があることで、共通している。

第4段階 自我哲学と自然哲学の同等性

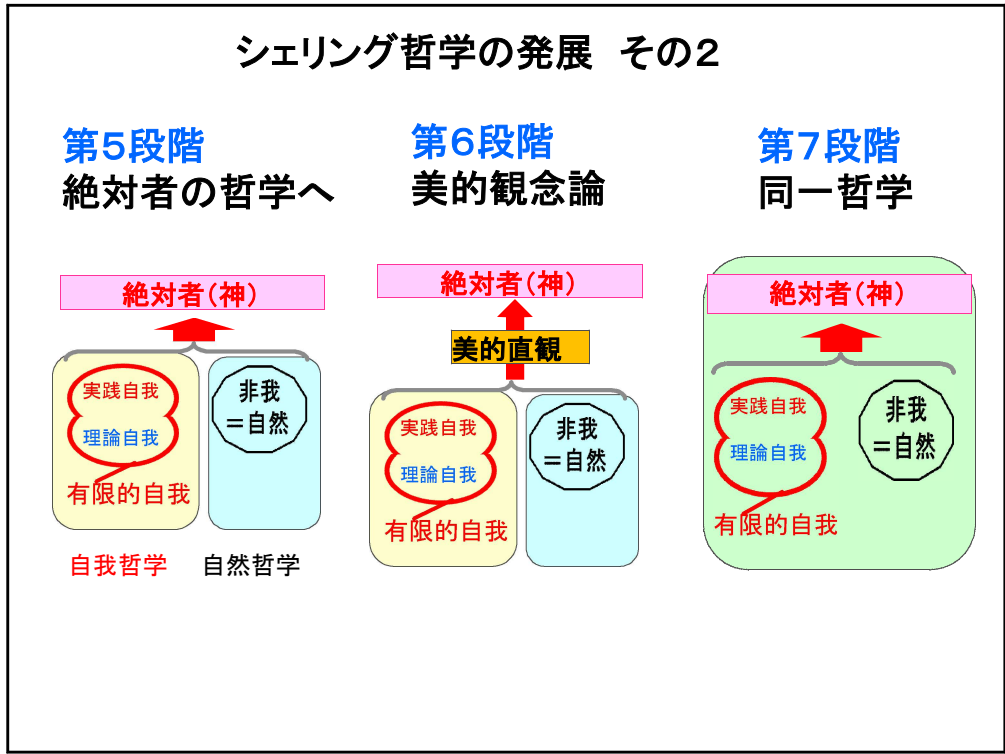
汎神論によって、自然哲学と自我哲学は同等となった。これが第4段階である。

図に示すように、シェリングの「超越論的観念論」は、自我哲学と自然哲学の2つからなる。

図では、2枚のパネル、左側のクリーム色のパネル（自我哲学）と、右側の青白のパネル（自然哲学）は、同等に見えるようにあらわした。2つは同じ構造であり、同等の権利を持っている。

観念論と実在論の対立軸でいうと、自然哲学は実在論であり、自我哲学は観念論である。そもそも正反対の思想であって、両立するはずがない。観念論では、自然（世界）は実在せず、人間の意識が作り出した現象にすぎないと思えるのに対し、実在論では、自然（世界）は実在すると考える。自然哲学も、自然は実在することを前提としている。したがって、シェリングの自我哲学と自然哲学は、2つはそもそも両立しない正反対の前提に立っている。観念論者は、フィヒテのように、自然には関心を持たないことが多い（ただし、カントは例外）。

シェリングが、本来両立することができないものを両立させているのは、観念論と実在論を問題にしているのではなく、両者によっては完全に表現できない他の体系を示したかったからという（ハルトマン、2004）。それは絶対者の体系である。



第5段階は、絶対者の哲学となったことである。

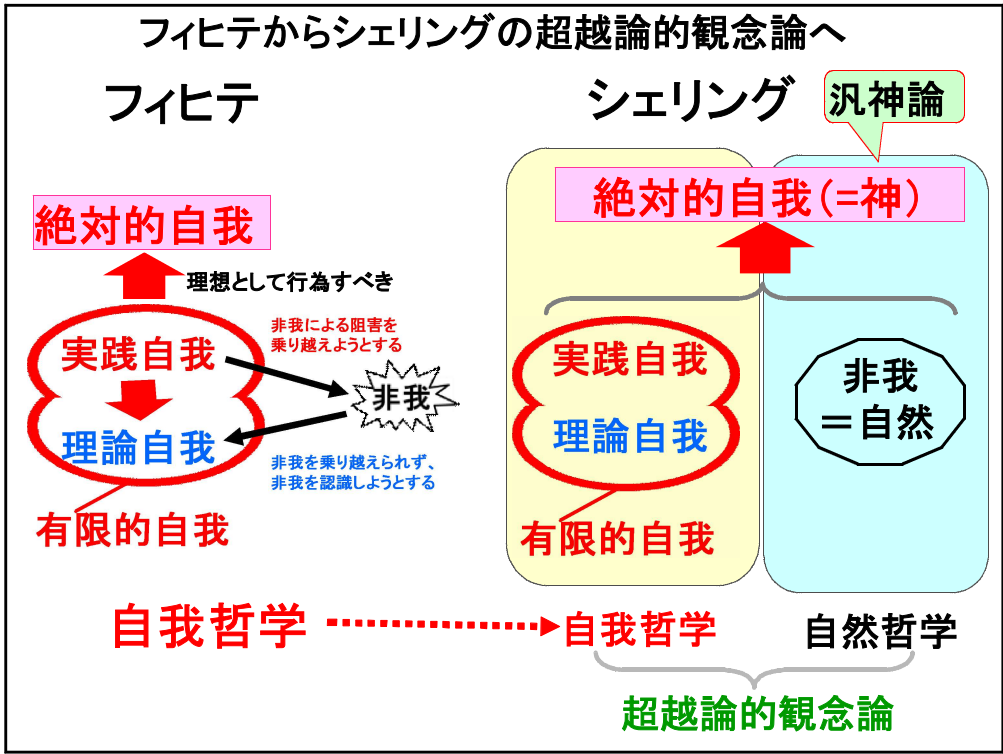
絶対的自我の位置づけは大きく変わった。前述のように、フィヒテの「絶対的自我」には、「超越論的統覚」と「神＝絶対者」という二重性がある。フィヒテによると「絶対的自我」は、前述のように、カントのいう「超越論的統覚」のことだという。「超越論的統覚」とは、われわれ人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的働きのことである。しかし、フィヒテは、カント流に「神」や宗教を退けながらも、実は、裏では「神」や宗教を取り入れていた。フィヒテによると、「絶対的自我」は、無限のものであり、「非我」の制限も受けることはないという。どうみてもこれは「絶対者＝神」のことである。フィヒテの「絶対的自我」には、神の意志、神の無限性が暗示されている。フィヒテが「絶対的」自我として、「有限的」自我を対置させた背景には、「神＝絶対者」を想定していたと考えざるを得ない。このように、フィヒテの「絶対的自我」は、二重性があり、中途半端である。

このあいまいさを批判したシェリングは、「絶対的自我」は「神＝絶対者」であると言い切った。「絶対的自我の哲学」というよりは、「絶対者の哲学」と呼んだほうがわかりやすくなった。

カントからの後退

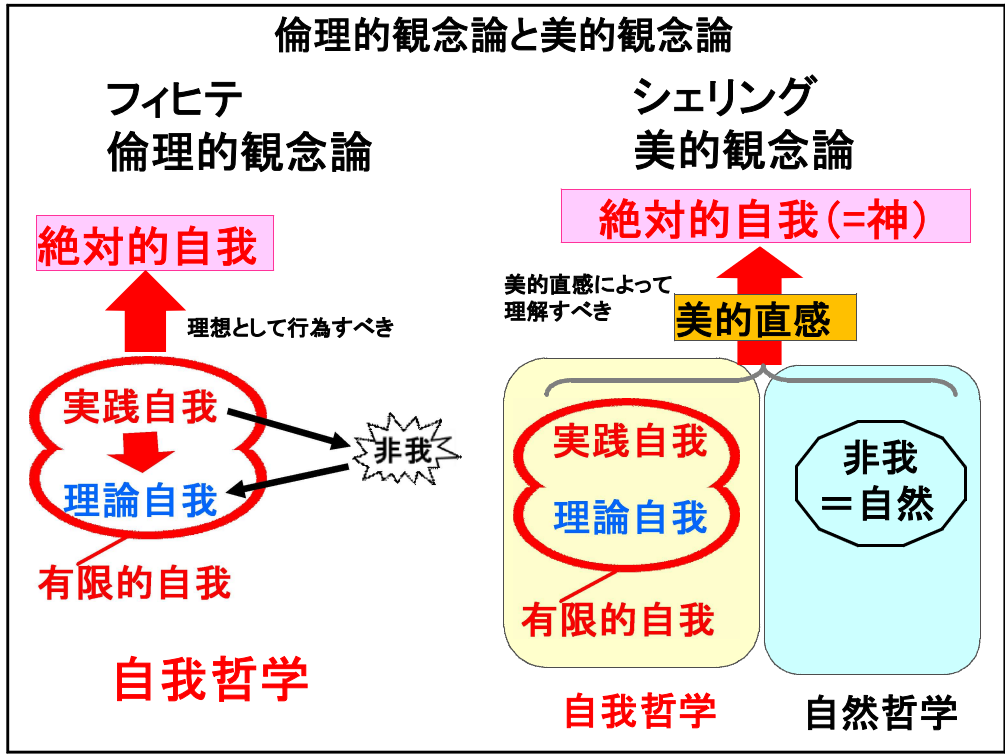
前述のように、カントは「神」学を哲学から切り離れた。しかし、フィヒテは暗黙の内に逆戻りして、再び「神」を取り込んでしまった。シェリングはもっと大っぴらに神（絶対者）を取り入れた。それはヘーゲルにも受け継がれた。フィヒテ→シェリング→ヘーゲルと続くドイツ観念論は、カントのように「神」を排除するのではなく、逆に「神」を取り込んでしまい、逆戻りのコースを歩んでいくのである。

シェリングの「超越論的観念論」



その後、1800年にシェリングは『超越論的観念論の体系』を発表した。これはカントやフィヒテのあとを継ぐ超越論的観念論（Transzendentalphilosophie、先験的観念論とも訳される）を体系化したものである。図に示すように、シェリングの超越論的観念論は、「自我哲学」と「自然哲学」の2つ部分からなっている。

ここに至って、フィヒテの自我哲学から出発して、シェリングはかなり違う地点に到達していることがわかる。



第6段階は美的観念論である。

哲学理論の違いは、人間に要求する行為の違いとなって現れる。フィヒテとシェリングの違いを上図と下の表に示した。

◆ フィヒテの倫理的観念論とシェリングの美的観念論

	フィヒテ	シェリング
	倫理的観念論	美的観念論
内容	「絶対的自我」を理想として主体的に行為すべきである	芸術の「美的直観」によって、「自然」の中に「絶対者」を直観的に把握すべきである。
目標	到達すべき目標は「絶対的自我」	把握すべき目標は「絶対者」であって、「絶対的自我」ではない。
例	「ドイツ国民に告ぐ」	芸術哲学

フィヒテは、絶対自我の実現をめざして主体的に行為すべきだとした。人間（有機的自我）は、絶対的自我を理想として主体的に行為すべきだとした。これが「倫理的観念論」と呼ばれる。その際に、非我の阻害を乗り越えようとして、徹底的に非我と戦わなくてはならない。非我を絶滅することが要請される。これが『ドイツ国民に告ぐ』に示したような能動的な激しい倫理的要請となって現れる。

これに対し、シェリングにとって、絶対的自我は、自我だけでなく、非我にも、あらゆるものに遍在している。だから、自分の中にも絶対的自我があることになるから、フィヒテのように到達すべき目標にはなくなる。非我が絶対的自我の一部だとしたら、非我には自我の一部も含まれることになり、非我は敵ではなくなる。非我と戦うことはみずからと戦うということにもなる。シェリングにおいては、非我と戦って絶対的自我を理想するわけではない。絶対的自我を直観で把握することが重要となる。

シェリングにとって、絶対的自我を把握するメディアは「芸術」なのである。フィヒテの哲学は「理論哲学」と「実践哲学」の2部門からなっているのに対して、シェリングは「理論哲学」、「実践哲学」と並び、第三の部門として「芸術哲学」をあげている。芸術哲学では、理論哲学と実践哲学を総合する自我の美的な働きを強調する。理論哲学と実践哲学は対立的なところがあり、それを統一するためには芸術が必要だという。天才の芸術作品においては、理論と実践の対立が統一されている。絶対者そのものが天才によって直観され、その作品に無限なもの、永遠なものが現れている。芸術には「神」が降りてくる。美的な直観においては、客観と主観、必然と自由といったあらゆる矛盾が消失している、というのである。

このように、芸術による美的な働きを重視するので、シェリングの超越論的観念論は「美的観念論」とも呼ばれる。

シェリングでは、フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』に示したような能動的な激しい倫理的要請は抜けおちてしまうのである。シェリングはみずからを「積極哲学」と呼ぶけれども、実際には、フィヒテのほうがよほど積極的・能動的な激しさがある。

芸術哲学

シェリングは芸術を買いかぶりすぎている気もするが、これも「ロマン主義」の影響だという。シェリングははじめに哲学と芸術の関係について論じる。シェリングは、芸術を大きく造形芸術と説話芸術（言葉によるもの）に分ける。

前者の「造形芸術」は、①一次元的芸術である音楽、②二次元的芸術である絵画、③三次元的芸術である彫刻・建築に分ける。絵画の天才としては、素描におけるラファエロとコレジオをあげ、明暗におけるレオナルド・ダヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロをあげ、色彩におけるティツィアーノをあげる。

後者の「説話芸術」については、①叙情詩（ダンテ、ペトルルカ、ボッカチオ）、②叙事詩・史劇（ホメロス）、③劇（悲劇のアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、喜劇のアリストファネス、近代劇のシェークスピア、カルデロン、ゲーテ）をあげる。

このように芸術に深入りしたことで、のちに1808年に、シェリングはミュンヘンの造形芸術アカデミーの事務総長に招かれ、芸術の行政に携わることとなる。このことで大学の哲学の第一線から退いて、「沈黙の時代」へと陥ることになるのである。芸術は趣味として楽しめばよかったのに、本職の哲学と結びつけてしまったために、本職の哲学が疎かになってしまった。よくあることである。人間としてはよくわかる。しかし、後述のように、哲学史からみると損失であった。

第7段階 同一哲学 前期思想の到達点

第7段階は同一哲学であり、これがシェリングの前期思想の到達点である。

1801年の『わが哲学体系の叙述』や1802年の『ブルーノ』において、シェリングは「同一哲学」Identitätphilosophie を打ち出した。それまでの自我哲学・自然哲学・超越論的観念論の集大成である。

絶対的自我は、自我のもとにも、非我のもとにも共通してある。もしこの絶対者が自我と自然（非我）の両方の根底にあるのであれば、それは精神的なものとは呼べない。精神的でもなければ、自然的でもなく、両者の完全な無差別でなければならないはずである。

シェリングによると、絶対者＝神はあらゆるものの根底に存在する。神は常に変化せず、自己同一的に存在する。このために「同一哲学」と呼ばれる。

自我と非我、主観と客観といった対立の根底に「絶対者」を考えた。絶対者は、精神や自然の根底にある共通的なものであり、絶対的な同一性である。絶対的な無差別としての絶対者は、唯一であり、無限でなければならない。絶対者のほかには何も存在しない。

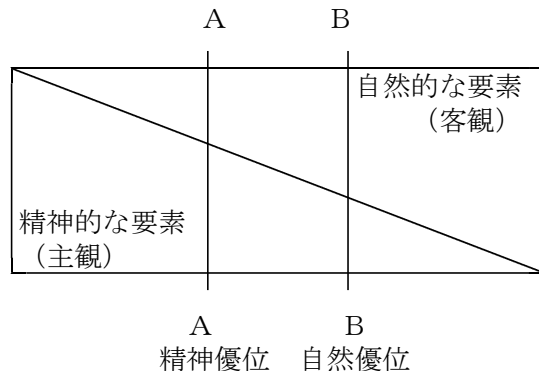
精神と自然、主観と客観といった対立は、二つの独立した実体ではなく、根底においては同一のものであり、一つの絶対的実体が現象として違ったあらわれ方をするにすぎない。これが同一哲学である。

ふたつ前の図「シェリング哲学の発展 その2」に示すように、もはや、自我哲学と自然哲学の区別はなくなり、絶対的自我と有限的自我の区別もなく、すべてが一色で塗られている。すべてが「絶対者＝神」の中に入ってしまう、無差別である。

それでは、無限の絶対者から、なぜ有限者が生じるのだろうか？ 絶対者は、精神と自然の区別はない。無差別である。これに対し、有限者は、差別（差異とか個別性とか）がある。

有限者のうちにおける差別は、この精神的な要素と自然的な要素のいずれかが量的に優勢となることによって生じる。あらゆるものの中にはつねにこの2つの要素が含まれているのであり、ただこのふたつの要素の占める割合によって互いに区別されるにすぎない。「自然」といってもその中には精神的な要素が存しているが、ただ自然的要素が優勢であるにすぎない。また「精神」といっても、その中には自然的要素も存しているが、精神的要素が優勢であるにすぎない。

例えば、下の図で、Aという有限者は、精神的な要素と自然的な要素の両方を持っているが、精神的な要素が多いので、精神優位である。一方、Bという有限者は、精神的な要素と自然的な要素の両方を持っているが、自然的な要素が多いので、自然優位である。このように、2つの要素の量によって、どちらが優位かが決まるとする。



シェリングの同一哲学はヘーゲルの『精神現象学』の中で批判された

シェリングの同一哲学について、ヘーゲルは1807年の主著『精神現象学』の中で批判した。シェリングのいうように、もしすべてのものが絶対者であれば、他と差別がなくなり、善悪真偽の区別もなくなり、価値

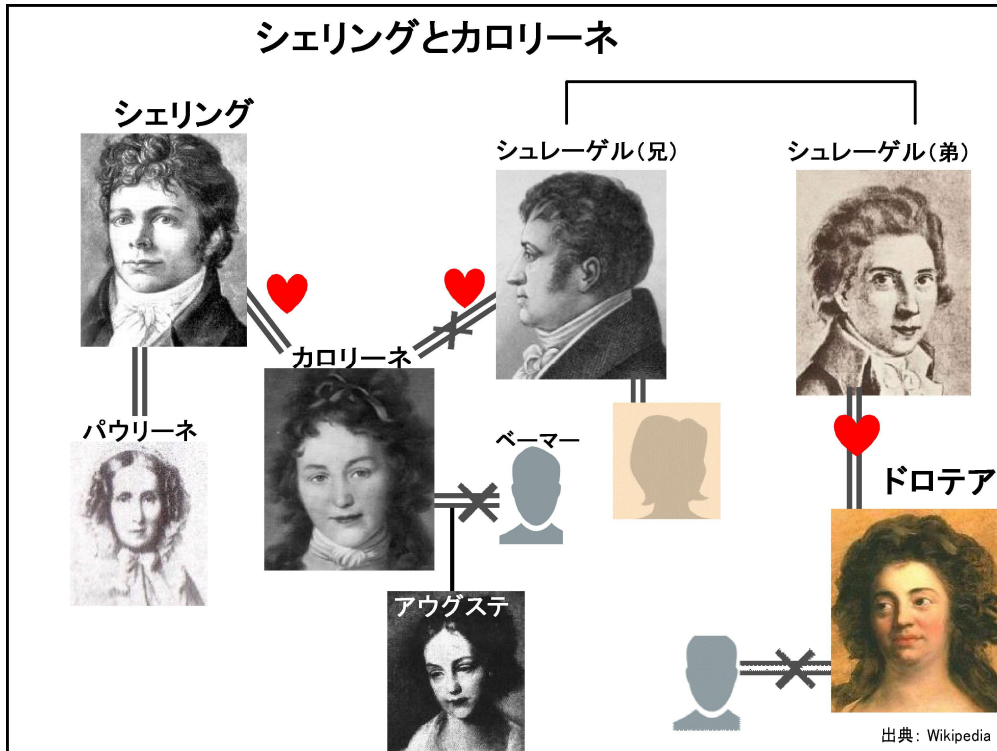
の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。そして、絶対者から有限者が差別化して現れることを説明できない。シェリングの絶対者の考え方について、ヘーゲルは、『精神現象学』の序文に、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはすべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。絶対者から有限者が現れることを説明できないという批判である。もし、すべてのものが神であれば、他と差別がなくなり無世界論となり、善悪真偽の区別がなくなり、価値の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。また、ヘーゲルは、「（シェリングのいう）絶対知は、ピストルから発射されたように（唐突である）」などとも罵倒した。

のちにヘーゲルは「歴史の目的論的解釈」に達した。歴史とは「神」がその本質をしだいに実現する過程である。神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せず自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。

ヘーゲルは、フィヒテの絶対自我説と、シェリングの同一哲学と格闘して、それらを乗り越え、神の自己実現という目的論的解釈に行き着いた。ヘーゲルがドイツ観念論の道筋（ストーリー）を作った。

カロリーネとの不倫と結婚

シェリングは、カロリーネという女性と知り合い、のちに結婚した。
ここで、シェリングとカロリーネをめぐる登場人物を整理しておこう。



カロリーネは、ベーマーと結婚して、娘のアウグステをもうけた。ベーマーが亡くなり、彼女はヴィルヘルム・シュレーゲルと結婚した。彼の弟がフリードリヒ・シュレーゲルである。シュレーゲル（弟）は、前述のように、ドロテアと不倫の末結婚し、それを小説『ルツィンデ』として発表した。

そのカロリーネにシェリングは恋をして、夫のシュレーゲル（兄）から奪ってしまう。その恋の契機となったのは、カロリーネの娘アウグステの死であった。後に、カロリーネは、シュレーゲルと離婚し、シェリングと結婚した。シュレーゲルはその後、別の女性と結婚した。

しかし、そのカロリーネも若くして病死してしまう。その後、シェリングは別の女性パウリーネと結婚した。

カロリーネの波乱に富んだ人生

彼女は波乱に富んだ人生を送った女性である。カロリーネ（1763～1809年）は、ゲッティンゲン大学の東洋学者ミヒャエリスの娘として生まれ、父から教育を受けた。

21歳で医師のベーマーと結婚して、3人の子供をもうけたが、生き伸びたのは長女アウグステ（1785～1800年）だけだった。

25歳で夫が亡くなったので、マインツにいた幼なじみのテレジア・フーバーのもとに身を寄せた。テレジアの夫はフォルスターというジャーナリストで、マインツをフランスの領土にしようという運動をしていた。フランス革命後のナポレオン戦争で、マインツの地がフランス軍に占領された。この時、カロリーネは、フランス軍の19歳の中尉と一夜の情熱で子供を身ごもってしまう。

その後、マインツの地は、プロシア軍が奪還した。フォルスターと交流して政治的な発言をしていたカロリーネはプロシア軍に逮捕されてしまい、妊娠中にもかかわらず、長期間釈放されなかった。身ごもっていた子供は、生まれて間もなく死んでしまった。

カロリーネとシュレーゲル（兄）の結婚

カロリーネの釈放に力を貸してやったのがロマン主義の学者ヴィルヘルム・シュレーゲル（1767～1845年）であった。シュレーゲルは、フンボルトを動かして、彼女の釈放に成功した。そうした愛情に推されて、33歳のカロリーネは、4歳年下のシュレーゲルと再婚した。カロリーネの連れ子として、娘のアウグステがいた。

シュレーゲルは、1798年にイエナ大学の教授として招かれたので、一家はイエナに移った。夫妻の家は、若い文学者や知識人のサロンとなった。そこへ、シュレーゲル（弟）もやってきて、シュレーゲル兄弟の家は、ドイツロマン主義運動の中心となった。

ロマン主義運動とカロリーネ

この頃のイエナは、ワイマールの宰相であったゲーテの政策によって、ドイツを代表する学者たちが教授として招かれていた。中でも、「ロマン主義」と呼ばれる美学運動がおこり、『アテネウム』という機関誌

が発行された。ロマン主義の中心となったのは、シュレーゲル兄弟、ティーク、ノヴァーリス、シュライアマハーなどであり、シェリングもこのサークルの理論的指導者となった。

ロマン主義運動の中心人物のひとりがカロリーネであった。シュレーゲル（兄）はイエナの新聞 Jena Allgemeine Literaturzeitung に多くの記事を書いたが、300本以上はカロリーネの名前が入っていた。

ゲッティンゲン大学の「大学マドモアゼル」

ゲッティンゲン大学の「大学マドモアゼル」

カロリーネ



テレゼ・フーバー



ドロテア・シュレーツァー



フィリッピネ・
エンゲルハルト



メータ・フォルケル・
リーベスキント



出典: Wikipedia

カロリーネは、当時、知識人としても有名であり、知的な女性のシンボリックな存在となった。

カロリーネは、ゲッティンゲン大学の「大学マドモアゼル」(Universitätsmamsellen) のひとりとして知られた。これは、ゲッティンゲン大学の教授の娘として有名な5人の知識人女性をさす。カロリーネと、前述のテレゼ・フーバーのほかに、フィリッピネ・エンゲルハルト、メータ・フォルケル・リーベスキント、ドロテア・シュレーツァーである。

◆ ゲッティンゲン大学の「大学マドモアゼル」

	生年～没年	父親
カロリーネ	1763～1809	ゲッティンゲン大学の教授 東洋学者ヨハン・ミヒャエリス
テレゼ・フーバー	1764～1829	哲学・言語学・考古学者クリスティアン・ハイネ
フィリッピネ・エンゲルハルト	1756～1831	歴史学者ヨハン・ガッテルラー
メータ・フォルケル・リーベスキント	1765～1853	哲学・神学者ルドルフ・ヴェデキント
ドロテア・シュレーツァー	1770～1825	歴史学者アウグスト・シュレーツァー

テレゼ・フーバー (1764～1829) は、ゲッティンゲン大学の哲学・言語学・考古学者クリスティアン・ゴットロープ・ハイネの娘であり、作家・編集者として有名である。マインツの地でゲオルク・フォルスターと結婚し、そこでカロリーネを助けた。のちにジャーナリストのルードヴィヒ・フーバーと結婚した。

フィリッピネ・エンゲルハルト (1756～1831) は、歴史学者ヨハン・ガッテルラーの娘で、詩人として知られる。

メータ・フォルケル・リーベスキント (1765～1853) は、哲学・神学者ルドルフ・ヴェデキントの娘で、作家・翻訳家として知られる。

ドロテア・シュレーツァー (1770～1825) は、歴史学者アウグスト・シュレーツァーの娘である。1787年にゲッティンゲン大学で哲学の博士号を得た。これはドイツで最初に女性に与えられた博士号である。後に富裕な商人と結婚し、リュベックに住んだ。彼女の自宅は文学サロンとなった。

カロリーネとの恋愛＝不倫

シェリングがカロリーネと出会ったのは1798年のことである。ライプツィヒにいたシェリングは、イェナ大学に赴任する直前に、夏の6週間をドレスデンで過ごした。ドレスデンには、シュレーゲル兄弟がいて、ロマン主義のサークルを作っていた。そこにはノヴァーリスやティークなどロマン主義の文化人が集まっていた。こうした文化人の中に入って、まだ学生気分の抜けないシェリングは大いに刺激を受けた。

この時、ヴィルヘルム・シュレーゲル（兄）の妻だったカロリーネと知り合った。シェリングは23歳、カロリーネは35歳のことである。


その年、1798年に、夫ヴィルヘルムがイェナ大学助教授となったため、一家はイェナに移った。同じく、シェリングもイェナ大学助教授として移った。シュレーゲルの自宅での文化サークルに参加したシェリングは、1799年頃にカロリーネに対する愛情が芽生えた。夫あるカロリーネとの不倫の恋である。しかし、ロマン主義の雰囲気では、これまで述べてきたいろいろな事例が示すように、こうした不倫や離婚などは当然のこととされた。

カロリーネの男性関係をみると、ほとんど年下の男性である。最初の夫ペーマーの年齢はわからないが、一夜の恋のフランス軍中尉は19歳であり、カロリーネより11歳年下である。2番目の夫のヴィルヘルム・シュレーゲルは4歳年下、3番目の夫となるシェリングは12歳年下である。年下の男を誘惑するファム・ファタール（男を破滅させる魔性の女）のようなところがあったのかもしれない。


アウグステの死


アウグステの死

シェリング




カロリーネ







アウグステ



母カロリーネに器を渡すアウグステ



出典: Wikipedia



右上の地図に示すように、この温泉地はシェリングのいるバンベルクから近かった。

ところが、1800年に大きな事件がおこった。

1800年5月～9月まで、シェリングはバンベルクで医学の研究をおこなった。医学者のマルクスとレッシユラブのグループに入り、ブラウン説に触発された実験をおこなったという。（のちに1802年には、ランツフト大学、すなわち後のミュンヘン大学から医学博士が授与された）

この年の7月にカロリーネは腸チフスにかかり、療養のために、娘アウグステとともに、ボックレット温泉（Bad Bocklet）に行った。右上の地図に示すように、この温泉地はシェリングのいるバンベルクから近かった。カロリーネは回復した。ところが、彼女の面倒をみていた娘のアウグステが赤痢にかかってしまい、10日もしないうちに死んでしまったのである。享年16。シェリングは、最後の数日間この地において、彼女の最後を看取った。

アウグステの死をめぐるスキャンダル

この事件は、考えてみると不自然であり、いろいろなスキャンダルのタネを生んだ。

第1に、シェリングとカロリーネの行動が疑惑のもとである。そもそもカロリーネが、夫のいるイェナを離れて、わざわざシェリングがいたバンベルクの近くに滞在したことは、不倫と疑われても仕方がない。しかも、ふたりがいたのは温泉地であった。シュレーゲルとカロリーネの夫婦関係は壊れただろう。

第2に、娘のアウグステの臨終の場にいたのは、義理の父親のシュレーゲルではなく、母親の愛人シェリングであった。これもスキャンダルであり、シュレーゲル一家の家族関係が壊れたであろう。

第3に、さらに悪いことに、シェリングは大きな間違いを犯した。アウグステが医師から処方された薬を見たシェリングは、医学的知識にもとづいて、その中にモルフィネの入った薬を発見して、危険とみて、こ

れを取り除いた。シェリングがどのような医学研修をおこなったかは不明だが、医者気取りで薬に口出したことは越権である。しかも病者は死んでしまった。薬を処方した医師が怒ったのは当然である。医師は、「シェリングの行為によって、救い得たアウグステが死んだ。シェリングは、中世的な自然哲学にもとづく誤った処方で病人を殺した」と主張した。シェリングの学者としての信用に関わるスキャンダラスな行為であった。

こうした数々のスキャンダルによって、シェリングはイエナ大学にいられなくなり、のちにイエナを去ることになるのである。

アウグステの死による実存的なショック

そうした社会的なスキャンダルも大きかったが、それよりも大きなショックは、愛するアウグステの死そのものであった。シェリングは、自分の存在が無くなったように感じ、病気になった。深く落ち込んでしまい、死を願う期間が続いた。それは実存的な限界状況であった（藤田、1962）。

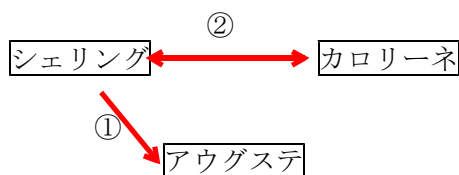
実の一人娘を失ったカロリーネの悲しみも強かった。左下の写真は、デンマークの彫刻家ベルテル・トルバルセンが作成したカロリーネとアウグステの親娘のレリーフである。アウグステの死後、カロリーネは墓石を作ろうとしたが、それが完成したのはカロリーネの死後であった。シェリングがトルバルセンに依頼して、カロリーネとアウグステの親娘の墓石のレリーフを作られたのである。このレリーフは、現在、コペンハーゲンのトルバルセン美術館に飾られている。またそのコピーがボックレット温泉の湯治館にも飾ってあるという。

シェリングをめぐる三角関係の謎解き

アウグステの死を分析すると、そこにはカロリーネとアウグステの母娘とシェリングをめぐる三角関係がある。この三角関係については、これまで哲学者がいろいろな解釈を試みている。しかも、クーノー・フィッシャーやヤスパースといった超一流の哲学者が、この三角関係の謎解きに真剣に挑んでいるのは楽しいことである。藤田（1962）を参考に紹介してみよう。

A説：代替説（一般の謎解き）

カロリーネの書簡集が発表される前には、一般に次のように解釈されていた。



①シェリングは、アウグステと結婚しようとしていた（シェリングが出会ったときのアウグステは13歳にすぎなかったが、彼女は早熟であり、亡くなったときは16歳であり、25歳のシェリングにとっては、結婚してもおかしくない年齢である）。しかし、アウグステは死んでしまった。

②シェリングはカロリーネに愛情を持っていたが、カロリーネには夫があったので、自制していた。

このため、アウグステを失った共通の悲しみが、シェリングとカロリーネを一層親しくさせた。

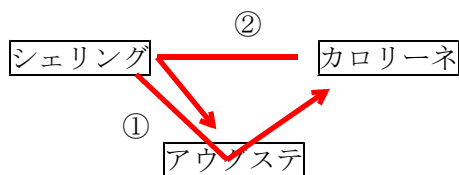
カロリーネは、アウグステの代わりに、シェリングと結婚した。つまり、そこにはカロリーネーシェリングと、アウグステーシェリングという二重結婚があったというのである。

B：クーノー・フィッシャーの謎解き

クーノー・フィッシャーは、ハイデルベルク大学の哲学科教授である。私のハイデルベルク論にも登場する一流の哲学者である。 <http://tannoy.sakura.ne.jp/heidelberg.pdf>

フィッシャーは、後に発表されたカロリーネの書簡集を読み解いて、この三角関係の謎解きに挑んだ。

（フィッシャーのシェリング論は翻訳されていないので、藤田（1962）の紹介に頼るほかはない。）



①シェリングはカロリーネに愛情を持っていたが、カロリーネには夫があったので、自制していた。

そこで、シェリングは、アウグステと結婚することによって、カロリーネの娘になりたいと望んだ。いわば「カロリーネの婿＝息子になりたい」説である。

②カロリーネは、母親のような気持ちでシェリングとアウグステを結婚させようとした。それを実現させるために、カロリーネはシェリングに結婚を勧め、娘のアウグステにもシェリングと結婚するように仕向けた。つまり、「カロリーネがシェリングとアウグステを結婚させようとした説」である。

ここにも、A説のような、カロリーネーシェリングと、アウグステーシェリングという二重結婚があったことになる。しかし、A説では関係が直接的であるのに対し、B説は間接的である。上の図に示すように、シェリングからカロリーネへの愛情は、アウグステを介して間接的に、カロリーネに向かっている。一方のカロリーネからシェリングへの愛情も、アウグステを介して間接的に、シェリングに向かっている。間接的ではあるものの、結果的にはシェリングとカロリーネの愛情関係であることに変わりはない。

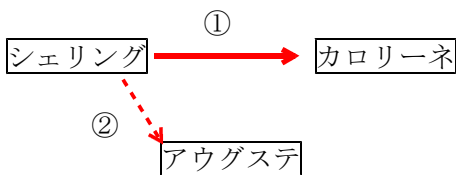
一時はそれが実現しかけたのである。しかし、アウグステの死により実現されなかった。アウグステがいなくなると、シェリングとカロリーネの愛情だけが残ったのである。

このような謎解きの根拠となるのはカロリーネの書簡集であり、それぞれに対応する手紙を引用している。

B説では、カロリーネの策略が主導的な立場にあり、シェリングはその策略に巻き込まれる受動的な立場である。それをシェリングを聖人君子にしようとする「美しすぎる誇張」があると、藤田（1962）は表現している。

C：ヤスパースの謎解き

実存主義哲学で有名なヤスパースも、著書『シェリング』の中で、シェリングとカロリーネとアウグステの三角関係について謎解きをしている。ヤスパースもまた、私のハイデルベルク論に登場する一流の哲学者である。 <http://tannoy.sakura.ne.jp/heidelberg.pdf>



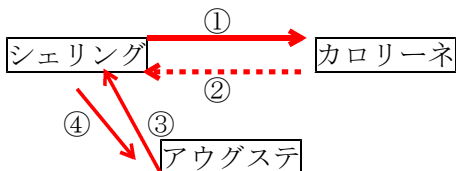
①シェリングははじめからカロリーネを女性として愛していた。それだけである。

②シェリングのアウグステに対する愛情は、カロリーネの娘に対する家族的愛情にすぎず、男女の愛情ではない（少なくともその証拠はない）。したがって、シェリングの母と娘への二重結婚があったというAの解釈はありえない（その証拠はない）。

シェリングの悲しみは、カロリーネの娘の死への家族的な悲しみにすぎない。

D：藤田（1962）の謎解き

藤田（1962）は『シェリング』の中で、ひとつの章を割いて、この問題に取り組んでいる。藤田は、B説とC説に対し、「真実はその中間にあるのではあるまいか」として、次のような謎解きをしている。



①シェリングはカロリーネに愛を持ったが、

②カロリーネは、シェリングに対して、友人としての感情しか持たなかった。

③アウグステがシェリングに対して敬愛を持った。それでアウグステは母親に嫉妬した。ここでは、16歳のアウグステの主体的な気持ちと行動が重視されている。

④それに対応して、シェリングもアウグステに愛情を持つようになった。

つまり、シェリングは、カロリーネとアウグステに二股をかけたことになる。だから、アウグステが死んだ後、二股をかけたことを自責して、落ち込んだ。また、アウグステの死によって、カロリーネへの接近ができなくなったことも残念で落ち込んだ、というのである。

アウグステ殺人事件

これをミステリー小説とみれば、いくらでもストーリーは考えられる。ひとりの男とふたりの女をめぐる三角関係のパターンは無限である。①シェリングが、三角関係の清算のために、アウグステの薬を操作して、毒殺した、とか。こうしてカロリーネを奪って、結婚した。②カロリーネが、シェリングの愛情を娘から奪うために、娘を殺した。③シェリングとカロリーネは共謀して、邪魔になったアウグステを葬った。④アウグステは母とシェリングのために身を引くために自殺した・・・

アウグステの死の不思議

もしアウグステが死ななかつたら、シェリングはアウグステと結婚したかもしれない。その場合、カロリーネは、シェリングにとって、義理の母という立場となっただろう。

だから、もしアウグステが死ななかつたら、シェリングはカロリーネと結婚することはなかつただろう。あるいはシェリングはその自責からカロリーネと別れた可能性も十分考えられる。

シェリングとカロリーネの結婚にとって、アウグステの死が本質的にかかわっていることは確かである。アウグステの死は、人生の不思議というほかはない。一流の哲学者たちが、この歴史恋愛ミステリーの下世話な謎解きの誘惑に抗えなかったのもよくわかる。

イエナ大学を去る

シェリングとカロリーネの不倫関係は続いた。

1801年には、夫のヴィルヘルム・シュレーゲルは、イエナを去って、ベルリンに移った。移動の理由はわからないが、前述のように無神論論争によりイエナ大学を嫌ったからでもあり、妻のカロリーネとシェリングの不倫に耐えられなかったからかもしれない。カロリーネはイエナに残った。この段階で2人の夫婦関係は破綻していた。

カロリーネとのスキャンダルに加え、シェリングがイエナを去るきっかけとなった事件が起こった。イエナの『文学新聞』にシェリングの著書を批判する記事が載り、シェリングと編集部の間で感情的な対立となった。これがエスカレートし、ついに「アウグステの死にシェリングが責任がある」といった匿名のパンフレットが出されることになった。シェリングは反論することができず、イエナを去りたいと思うようになった。

ちなみに、この争いにおいて、カロリーネの夫ヴィルヘルム・シュレーゲルはずっとシェリングの側に立って助けたという。

フィヒテが学生団体とのトラブルと無神論論争によりイエナ大学を去り、シェリングはカロリーネとアウグステのスキャンダルでイエナを去った。続くヘーゲルも家政婦とのスキャンダルでイエナを去った。ドイツ観念論哲学のビッグ3がイエナ大学を去った理由は、意外にも学問的なものではなく、対人関係や下半身のトラブルであった。

ヴェルツブルク大学へ移る

カロリーネとのスキャンダルがおこり、イエナを出たいと思っていた時、シェリングは、ヴェルツブルク大学から、哲学科の正教授のポストに呼ばれたのである。イエナ大学では、カロリーネとのスキャンダルのために、教授に昇進することは難しかっただろう。そこで、ヴェルツブルク大学からの招聘は教授ポストに昇進するチャンスであった。

シェリングがイエナ大学の教授となったと書いてある本（岩崎、1967、24頁）や、シェリングが「フィヒテの後任としてイエナ大学の教授の地位についた」と書いてある本（澤田、2015、192頁）があるが、シェリングの経歴を調べても、イエナ大学で教授に昇進した事実はない。

1803年にシェリングは、ヴェルツブルク大学の哲学科教授として移った。

この時、パウルスやニートハンマーといった有名教授がイエナ大学を去り、ヴェルツブルク大学に移った。こうした教授の大量移動は、1799年の無神論論争の余波とされている。つまり、フィヒテがそれによって大学を追われるなど、イエナ大学の保守的な雰囲気嫌われたからである。カロリーネの夫のヴィルヘルム・シュレーゲルも1800年にはイエナ大学を去って、ベルリンへ移った。

ちなみに、ハインリヒ・パウルス（1761～1851年）は、この時はシェリングと仲が良かったが、後に悪くなった。シェリングとパウルスの関係は、シェリングが18歳の時から始まった。1793年、18歳のシェリングは、「神話、歴史的伝説、および最古の世界の哲学説について」を書いて、当時イエナ大学東洋学教授だった先輩のパウルス編集の雑誌『メモラビリエン』に寄稿した。パウルスの娘ゾフィーは、かつてのカロリーネの夫ヴィルヘルム・シュレーゲルと1817年に結婚した。これもシェリングへの嫌がらせに近いかもしれない。さらに、後述のように、パウルスは、1843年に、『ついに顕わとなった啓示の積極哲学』というタイトルでシェリングの講義録を無断で出版した。これに対してシェリングは訴訟をおこしたが、裁判に負けて、それ以後、ベルリン大学での講義をやめた。

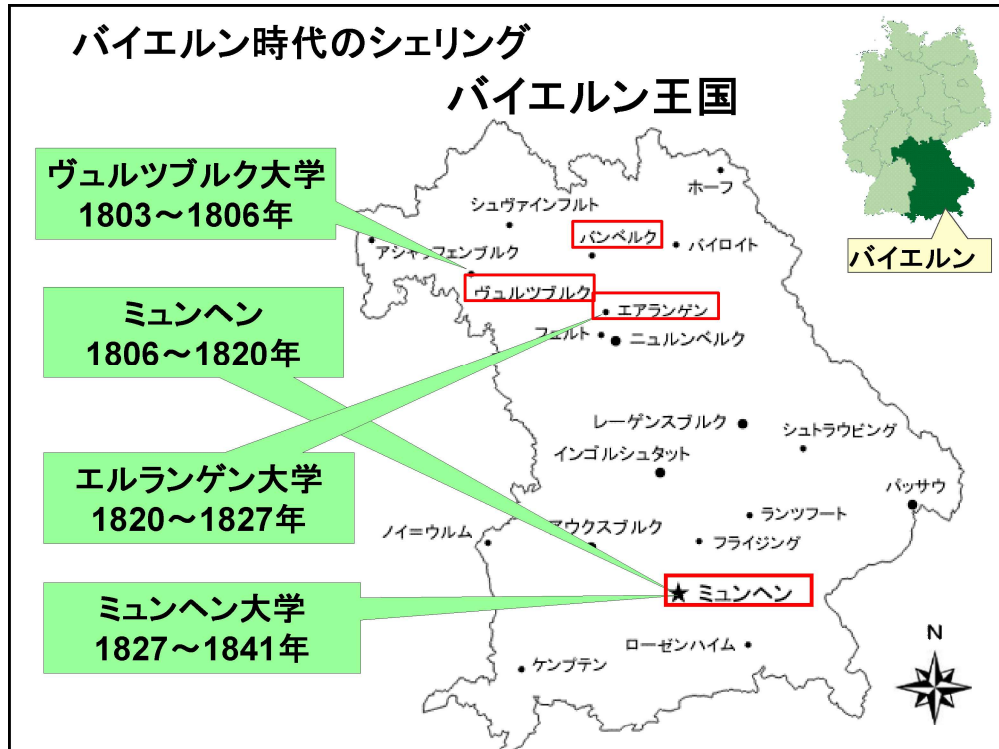
また、ニートハンマーは、後述のように、ヘーゲルが主著『精神現象学』の出版で助けてくれたり、ヘーゲルがイエナ大学を出て困っているときに、バンベルクで新聞の編集の仕事を斡旋してくれたり、ニュルンベルクのギムナジウムの校長職を推薦してくれたり、ヘーゲルの恩人となった学者である。

⑤ヴュルツブルク大学教授 1803～1806年

ヴュルツブルク大学は、1402年に創設された古い大学であるが、ずっとカトリックの大学であった。1803年にヴュルツブルクがバイエルン選帝侯領となり、ヴュルツブルク大学はプロテスタント系の学者も集めることになった。それでシェリングが呼ばれたようだ。

1803年にシェリングは、ヴュルツブルク大学の哲学科教授として移った。

バイエルン時代



1803年にイェナを出たシェリングは、ヴュルツブルク大学→ミュンヘン→エルランゲン大学→ミュンヘン大学と移動した。地図に示すように、これらはいずれもバイエルン王国に位置する。

1803年から、ベルリン大学に移る1841年までの38年間は、シェリングの「バイエルン時代」と呼べる。この地図からも、シェリングがいかにバイエルン王国と関係が深かったかがわかる。

カロリーネとの結婚

1803年に、カロリーネは夫のシュレーゲル（兄）と離婚が成立した。この離婚にはゲーテの力添えもあったと言われている（ゲーテはいつも誰にでも口を出すいっちょかみ）。

そこで、自由になったカロリーネとシェリングは、ムーアハルトの地へ行き、そこで牧師となっていた彼の父親によって、結婚したのであった。

この結婚式には、ヘルダリンも参加したが、当時ヘルダリンの精神障害は重くなっており、これがシェリングが彼と会った最後の機会となった。

1805～1807年の間に、カロリーネは、単著またはシェリングと共著で、多くの記事を発表し、また多くのロマン主義者たちと交流した。

ヴィルヘルム・シュレーゲルのその後

妻を寝取られたヴィルヘルム・シュレーゲルは、その後はどうなっただろうか。

シュレーゲルは、すでに1800年にはイェナ大学を去って、ベルリンへ移った。カロリーネはイェナに残り、この段階で夫婦関係は破綻していた。

1802年のシェリングと『文学新聞』との戦いでは、シュレーゲルはシェリングを擁護した。

1803年にカロリーネとの離婚が決まった。

1808年に、『インド人の言語と知恵について』を発表し、その中で、シェリングの汎神論を批判した。

1804年には、フランス人の評論家スタール夫人と知り合い、高額報酬で子弟の家庭教師として雇われた。シュレーゲルは、スタール夫人の家族といっしょにヨーロッパを旅行し、その間に夫人に文学や哲学の知識を与えた。それにより、夫人が『ドイツ論』を執筆するのを手伝った。

夫人の死後、1817年に、神学者パウルの娘ゾフィーと結婚した。パウルスは後にシェリングの講義録を無断で出版し、シェリングに訴えられた神学者であり、その娘と結婚したことは、シェリングへの嫌がらせだったかもしれない。

ヴュルツブルクでのシェリング

新天地を求めてヴュルツブルクに移ったシェリングであったが、しかし、そこでもシェリングに敵対する勢力があった。ヴュルツブルク大学はプロテスタントの大学となり、シェリングが呼ばれたのであったが、まだカトリックの勢力は根強く、ヴュルツブルクの宗務当局は、カトリック教徒に対し、シェリングの講義を聴くことを禁止した。シェリングの汎神論的立場への反感もあったかもしれない。

このため、彼は、3年ただけで、ヴュルツブルクを出た。

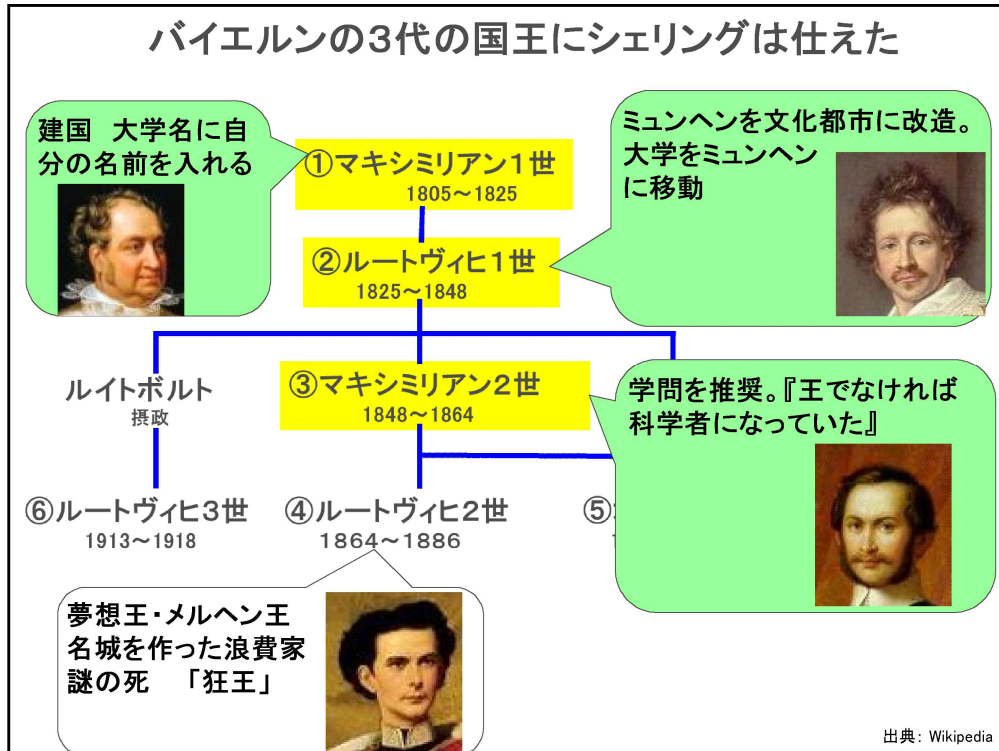
ヴュルツブルク時代の1804年に、シェリングは『宗教と哲学』を出版し、宗教へと転換した。このあたりからすでに後期思想に移っている。

⑥ミュンヘンで文化行政 1806～1820年

1806年、シェリングはミュンヘンに移住した。この年から、ベルリン大学へ行く1841年までの35年間は、ミュンヘンを治めていたバイエルン国王に仕えて文化行政の仕事をした。

大学を離れたので、哲学の第一線から退いた。全く哲学の論文を発表しない「沈黙の時代」に突入した。つまり、バイエルン王との関係は、シェリングの哲学者としての人生にネガティブな影響をもたらした。このことは、哲学史においてはあまり触れられておらず、大学論という観点からみて初めて明らかになることである。このことを以下で詳しくみていきたい。

バイエルンの3代の国王にシェリングは仕えた



シェリングは、バイエルンの3代の国王、マキシミアン1世、ルートヴィヒ1世、マキシミアン2世と関わりがあった。

マキシミアン1世 (在位1799～1825年)

バイエルン地方は、12世紀からヴィッテルスバッハ家が支配し、昔から独立国として扱われてきた。

1799年、マキシミアン1世(1756～1825年)は、バイエルン選帝侯として即位した。

1806年には、ナポレオンの力を借りて、王国として昇格し、マキシミアン1世が初代国王となった。その後、ナポレオンが退却し、1814年にウィーン体制ができて、王国を存続させた。彼は「啓蒙専制君主」であり、上からの力でバイエルン王国を近代国家として作り変えるために、いろいろな改革をおこなった。教育にも力を入れ、1800年には、インゴルシュタット大学をランツフートに移動し、自分の名前を大学名に入れて、ルートヴィヒ・マキシミアン大学とした。

ルートヴィヒ1世 (在位1825～1848年)

1825年にあとを継いだ息子のルートヴィヒ1世(1786～1868年)も、「啓蒙専制君主」として、いろいろな改革をおこなった。ルートヴィヒ1世は、ミュンヘンを「文化都市」「芸術の都」とすべく大改造をおこなった。ケーニヒス広場(王の広場)を作り、その周りにギリシャ風神殿を建て、「イーザル川のアテネ」をめざした。彼はギリシャ・ローマの文化に憧れて、それをミュンヘンに持ち込もうとした。アルテピナコテークとノイエピナコテーク(絵画館)を作るなど、芸術政策に力を入れた。ミュンヘンの学問・文化・芸術の基本的なインフラストラクチャーを作ったのはルートヴィヒ1世である。

また、1826年には、彼はランツフートにあったインゴルシュタット大学をミュンヘンに移動させた。現在のミュンヘン大学の建物はルートヴィヒ1世によって作られた。大学の前のルートヴィヒ通りは、田舎道を彼が整備させたものである。

しかし、ルートヴィヒ1世は、1848年にフランスでおこった3月革命がヨーロッパ中に波及した1848年革命の影響で退位した。愛人ローラ・モンテスとのスキャンダルも退位の要因である。

マキシミアン2世 (在位1848～1864年)

1848年にあとを継いだ息子のマキシミアン2世(1811～1864年)も「啓蒙専制君主」の典型であり、学

問を推奨した。『王でなければ科学者になっていた』と言われた王である。科学と建築に興味を持ち、バイエルン州立博物館を作ったり、ドイツ工業博覧会の第1回目をミュンヘンで開催した。北ドイツに留学していたことがあり、北の学者や文人とも親交が深かった。24歳～29歳（1835～40年）には、シェリングから家庭教師として哲学の講義を受けた。これをマクシミリアン自身が筆記し、それが公刊されたほどの知識人であった。

ルートヴィヒ 2 世（1864～1886年）

ちなみに、マクシミリアン 2 世の後を継いだ息子のルートヴィヒ 2 世は「魔王」としてよく知られている。18歳で国王となったが、政治には興味がなく、趣味に生きた。彼はワーグナーの音楽に傾倒したり、ノイシュバンシュタイン城やヘレンキームゼー城など、ミュンヘンのまわりにはたくさん名城を作った。そのため「夢想王」とか「メルヘン王」と呼ばれる。しかし、城を作って莫大な浪費をしたために、国家財政が傾いた。このため侍医団によって精神病であると診断され、国王を退位させられた。このためルートヴィヒ 2 世は、「魔王」とも呼ばれる。退位の直後、ルートヴィヒ 2 世は、侍医の精神科医グッデンとともに、湖で水死体で見つかった。事故死とされているが、死の経緯は不明である。これによりルートヴィヒ 2 世をモデルにした多くの小説（森鷗外『うたかたの記』、久生十蘭『泡沫の記』など）や、映画（ルキノ・ヴィスコンティ『ルートヴィヒ／神々の黄昏』など）があらわれた。その後、バイエルン王国は、1871年のプロイセン王国のビスマルクによるドイツ統一後も、ドイツ帝国の中の一王国として生き延びた。しかし、第一次大戦でドイツが敗北し、ドイツ帝国が解体したために、バイエルン王国も終わった。その後、ドイツは共和制のワイマール共和国となり、バイエルンはその中のひとつの州となった。

以下、3人の王とシェリングの関係についてみていきたい。3人を色分けして示す。

◆バイエルンの3代の国王にシェリングは仕えた

バイエルン王室	ミュンヘンの大学	シェリング
1799 マクシミリアン 1 世 バイエルン選帝侯に即位	1800 マクシミリアン 1 世がインゴルシュタット大学をランツフートに移転	1798～1803 イェナ 大学助教授
		1803 ヴュルツブルク 大学教授
1806 マクシミリアン 1 世 バイエルン王に即位		1806 ミュンヘン 学士院会員 (大学を離れる)
		沈黙の時代
		1820～1827 エルランゲン 大学教授
1825 ルートヴィヒ 1 世 即位	1826 ルートヴィヒ 1 世がインゴルシュタット大学をミュンヘンに移転 (ミュンヘン大学と呼ばれる)	1827 ミュンヘン 大学教授
		1835～40 皇太子マクシミリアンへの哲学講義
		1841 プロイセンの ベルリン 大学へ
1848 マクシミリアン 2 世 即位		1849 マクシミリアン 2 世よりバイエルン大十字勲章を受ける
		1853 マクシミリアン 2 世より貴族に列せられる
		1854 病死

マクシミリアン 1 世の時代（在位1799～1825年）

シェリングは、マクシミリアン 1 世がバイエルン王として即位した1806年に、この国王から呼ばれてミュンヘンに移住した。

ミュンヘンで文化行政に関わり大学を離れる

シェリングは、1806年には、バイエルン学術アカデミー Bayerischen Akademie der Wissenschaften の会員に任命された。

1807年のマクシミリアン 1 世の聖名祝日には、シェリングは、「造形芸術の自然との関係について」という記念講演をおこない、マクシミリアン 1 世と息子のルートヴィヒ 1 世と500名以上の聴衆を前に、大成功を収めた。

大学教員から事務総長への「転職」

翌1808年には新設された「造形芸術アカデミー Akademie der Bildenden Künste」の事務総長に任命されて、

芸術の行政に携わった。前述のように、この時期のシェリングは芸術哲学（美的観念論）をテーマとしていたので、このポストは彼の関心に沿ったものであった。しかし、大学教員から美術学校の管理職になるというのは、まさに「転職」である。哲学から遠ざかることになった。

造形芸術アカデミー Akademie der Bildenden Künste は、1808年マクシミリアン1世が王立美術院（Königliche Akademie der Bildenden Künste）として設立したものである。校長にはヨハン・ペーター・フォン・ランガーを迎え、事務総長にシェリングが任命された。このアカデミーは、「ミュンヘン美術院」として日本でもよく知られている。当時のミュンヘンには、5000人の画家が集まっていたといわれるほど、ヨーロッパ美術の中心地であり、その中核がミュンヘン美術院であった。ミュンヘン美術院の画家たちは「ミュンヘン派（Munchner Schule）」と呼ばれた。ここに留学した日本人が原田直次郎であり、彼をモデルにして森鷗外が書いた小説が『うたかたの記』（1890年）である。その舞台としてこのアカデミーが登場する。

ミュンヘンについて詳しくは、私の『文化都市ミュンヘンを歩く』を参照いただきたい。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/munich.pdf>

哲学の第一線を退いて宗教論へ

ミュンヘンに来てからのシェリングは、哲学者フォン・バーダーとの交流により、ヤコブ・ベーム（1575～1624年）の神秘主義の影響を受けて、宗教への関心を深めるようになった。宗教論にのめり込んだのは、1809年に妻のカロリーネを亡くしたことの影響もあったかもしれない。

1809年に、シェリングは著書『人間的自由の本質』を発表した。この著書で、シェリングは同一哲学を捨てて、宗教的立場に移行し、後期哲学への一歩を踏み出したといわれる。しかし、これによって、シェリングは哲学の第一線から退いた。この背景には、フィヒテやヘーゲルとの論争に疲れて、哲学がいやになったこともあったかもしれない。

ミュンヘンはビール産業がさかんなので、シェリングもビールを飲みすぎて、仕事の生産性が下がったのかもしれない。確かにミュンヘンの人はビールを飲みすぎる。森鷗外もミュンヘン留学中にビールの利尿作用の研究をした。精神医学者のクレペリンは禁酒主義者であり、ミュンヘンで禁酒運動をして、ビール会社や地元の人とトラブルをおこした。

沈黙の時代 大学を離れたシェリングの不幸

事実、1809年に、34歳で著書『人間的自由の本質』を発表してから、シェリングはその後亡くなるまで、著書を発表しなくなったのである。何回か著作を出しかけたが途中でやめたし、講義録は発表されたものの、まとまった著作として発表することなくこの世を去ったのである。シェリングの未公開の原稿や講義ノートは、シェリングの息子のアウグスト・シェリングが1857～58年に全集を出版して、初めて明らかとなったのである。

著書を発表しなくなった1809年以降のシェリングは「沈黙の時代」と呼ばれる（ハルトマン『ドイツ観念論の哲学』）。これによって、シェリングは哲学界から一時忘れられた存在となった。

「沈黙の時代」に入った最大の理由は、やはり大学を離れたことであろう。1806年～1820年の14年間、シェリングは大学から離れた。当時、バイエルンの大学は、ミュンヘン近郊のランツフトに置かれたので、ミュンヘンには大学がなかったからである。また、当時、ベルリン大学も創設されていなかった。

おそらく、シェリングも、大学を離れるのは短期間だけであって、すぐまたどこかの大学に戻れると思っていたのではなかろうか。まだ31歳の若さである。ところが、それが意外に伸びた。

シェリングは、15歳で大学に入り、ずっと大学ですごしてきた根っからの大学人である。パーソナリティとしても、大学人的なパーソナリティといえるだろう。大学で、若い学生を前に講義をしてこそ学問の能力を発揮できたのである。だから、大学を離れてしまうと、学問の生産性が低下したのは当然である。その意味では、バイエルン王国の行政の仕事をしたことは、哲学史にとっては不幸なことであった。

大学こそ学問の創造を生む場であるという当然のことが、シェリングの「沈黙の時代」の存在から、逆に証明される。このことも、哲学史という視点を離れて、大学論という視点からドイツ観念論哲学を眺めた時に明らかになることである。

フィヒテとの決別

1806年、前述のように、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。

ヘーゲルとの決別

ベルリン大学 フィヒテ後任人事の投票

ヘーゲル



シェリング



フリース



出典:wikipedia

1807年、ヘーゲルは最初の主著『精神現象学』の序文において、シェリングの哲学を罵倒した。これによって、シェリングはヘーゲルと決別した。

1814年にベルリン大学の哲学教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のままだった。1816年に後任として、3人の候補があげられた。シェリング、ヘーゲル、フリースの3人である。投票の結果ヘーゲルが決まった。

正式にヘーゲルに敗れたことは、シェリングにとってはショックだったであろう。とはいえ、当時のベルリン大学は、創設まもない新設大学だったので、それほどショックは大きくなかったかもしれない。

ミュンヘンのシェリングのもとをハイネが尋ねた。その時に、シェリングは「わしのアイディアをヘーゲルは奪い取った」とぐちったという（バウムカルトナー『シェリング哲学入門』）。

カロリーネの死

1809年、シェリングと妻のカロリーネは、彼の両親のもとへと旅行していた。途中でカロリーネは、奇しくも娘のアウグステと同じ赤痢にかかり、療養先のマウルブロンで亡くなった。この時、カロリーネ46歳、シェリング34歳だった。2人が夫婦だったのは6年間だけだった。

あれだけのドラマチックな愛で結ばれた2人であったが、その結末はあっけなかった。シェリングは「私をこの世につなぐ最後の絆は断たれてしまった」と友人に述べている。

この体験がもとになって、シェリングは1810年に、『クララ』という対話編（未公開）を書いて、夫を亡くして病気になる妻を描いた。これによりみずからの悲しみを慰めたと言われる。こうした不幸な愛の体験が、シェリングの神への信仰や愛についての哲学に影響を与えたことは当然であろう。

パウリーネとの再婚

3年後の1812年、37歳のシェリングは、パウリーネ・ゴッターという23歳の娘と再婚した。彼女は亡妻カロリーネの友人であり、カロリーネの死とともに悲しむことによってしだいに近づいていったと言われる。パウリーネは、ゲーテの友人である詩人の娘でもある。ゲーテの紹介によって知り合ったと書いてある資料もある。

その後、シェリング夫妻の間には、男子3人と女子3人が生まれた。ここからシェリングはおちついた家弟生活を送ることになる。

⑦エルランゲン大学教授 1820～1827年

14年間の空白をへて、シェリングはふたたび大学で教えることになった。1820年の冬に、エルランゲン大学に赴いて、哲学の講義を始めた。ミュンヘンにおける行政官としての地位を辞することなく、エルランゲン大学の固定義務のない名誉教授として私的な講義だけをおこなった。

「沈黙の時代」のシェリングは、しかし、全く哲学を忘れたかというところではない。実は、この時期に、後期思想である積極哲学を模索していた。エルランゲン大学において、シェリングは「神話の哲学」といった後期思想の中心的テーマの講義や、「近世哲学史講義」などをおこない、その講義ノートが刊行されている。

ここでも、大学という場で若い学生に対して講義をすることが、学問の創造を生むという当たり前のことが証明される。

ルートヴィヒ1世の時代（在位1825～1848年）

1825年に即位したルートヴィヒ1世が、1826年にランツフートのインゴルシュタット大学をミュンヘンに移転した。これによってミュンヘン大学と呼ばれるようになった。

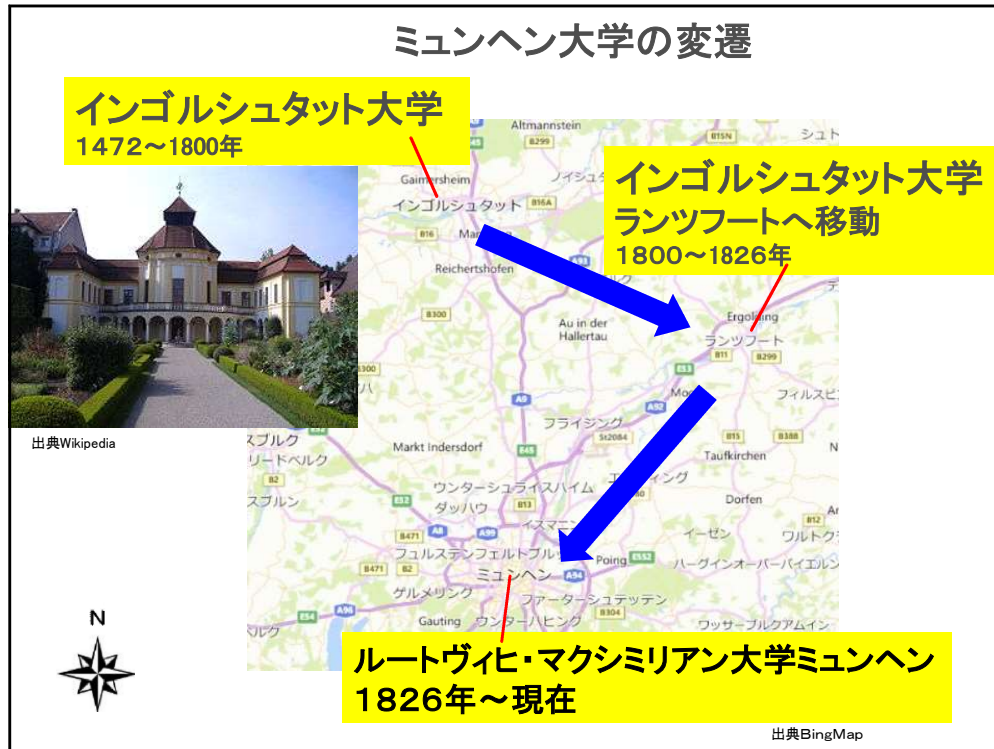
⑧ミュンヘン大学教授 1827～1841年

1827年に、シェリングは、ルートヴィヒ1世の招きで、ミュンヘンに戻り、ミュンヘン大学の教授となった。大学に戻ったことによって、彼はまた哲学への関心を再生させていった。

大学以外の文化行政の仕事も続けた。1827年には、バイエルン学術アカデミーの会長に任命された（この職は1841年まで続けた）。

同時に、彼は、アカデミーに新しく作られた自然科学博物館の館長もつとめた（現在のStaatliche Naturwissenschaftliche Sammlungen Bayerns）。

シェリングを翻弄したミュンヘン大学の歴史



ミュンヘン大学の歴史は、シェリングの学者人生と大きく関わっている。

ここでミュンヘン時代の歴史を振りかえっておこう。ミュンヘン大学はバイエルン王家によって作られた。この大学は、過去に2回引っ越している。

①インゴルシュタット時代

1472年に、インゴルシュタットIngolstadtの地に大学が創設された。創設したのは、バイエルン公のルートヴィヒ9世Duke Ludwig IX である。

②ランツフト時代

インゴルシュタット大学は、1800年、バイエルン国王マキシミリアン1世によって、ランツフトLandshutの地に移転した。移転の理由は、インゴルシュタットの街がフランス軍に侵略されそうになったからである。1802年には、以上の二人の国王の名前をとって、この大学をルートヴィヒ・マクシミリアン大学と正式に呼ぶことが決まった。この名前が現在まで続いている。

③ミュンヘン移転

1825年に、バイエルン国王としてルートヴィヒ1世が即位し、彼は1826年に、インゴルシュタット大学をミュンヘンに移動させた。これ以後、ミュンヘン大学と通称されている。

ミュンヘンに大学ができるのは1827年のことである。もし、あと20年早くミュンヘンに大学ができていたならば、シェリングは大学で教えるのをやめずに、「沈黙の時代」もなく、哲学の第一線で活躍していたかもしれない。シェリング本人の責任というよりは、歴史の責任といってもよいかもしれない。

ベルリン大学への招聘

しかし、1841年、シェリングは、プロイセン王から引き抜かれ、ベルリン大学へ移動した。これによってバイエルン王国との正式な関係はなくなった。

ミュンヘン時代の1806～1841年の34年間は、哲学の業績の上では、低調な時代であった。イエナ大学時代を頂点として、シェリングの学問的生産性は急激に低下した。社会背景としては、1814年のウィーン会議により、社会全体が保守化したということもあったかもしれない。

彼が最後の輝きを取り戻すのは、ベルリン大学に呼ばれてからである。もし、ベルリン大学に呼ばれなかったら、哲学史から忘れられてしまっていたかもしれない。

マクシミリアン2世の時代 (在位1848～1864年)

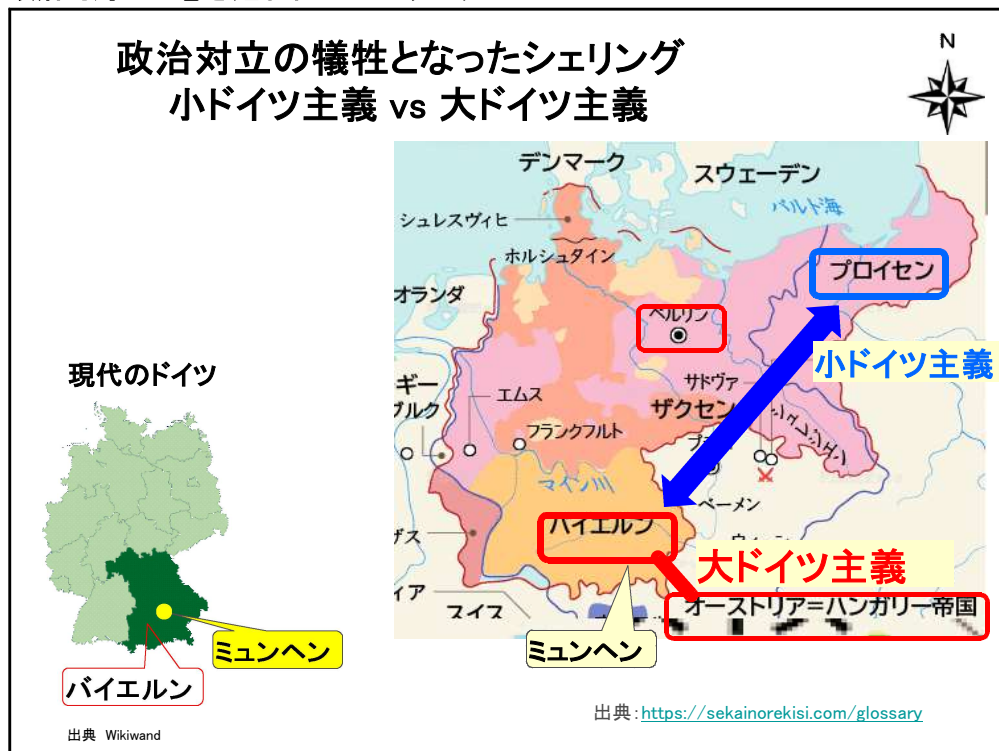
1848年に、皇太子のマキシミリアンはバイエルン王に即位して、マキシミリアン2世となった。

マキシミリアン2世とシェリングの生涯にわたる師弟愛

すでにシェリングはバイエルンを去っていたが、マキシミリアン2世とシェリングの関係はずっと続いた。それまでの2人の関係を振りかえると、1835年、60歳のシェリングは、ルートヴィヒ1世から依頼を受けて、皇太子のマキシミリアンに対して哲学の講義をした。この仕事は5年間続いた。これをマキシミリアン自身が筆記し、それが公刊された。マキシミリアンとの師弟関係で深い内面的なつながりが生じた。ヘーゲルとの間の師弟関係は不幸な結末を辿ったが、マキシミリアンとの師弟関係は落ち着いたものであった。

マキシミリアン2世のシェリングに対する尊敬は続き、1849年、シェリングに対してバイエルン大十字勲章を与え、1853年にはシェリングを貴族に列した。

政治的対立に巻き込まれたシェリング



バイエルン王国は、プロイセン王国とドイツ統一をめぐる張り合っていた。北のプロイセン王国の「小ドイツ主義」と、南のオーストリア帝国（ハプスブルク家）の「大ドイツ主義」が、覇権をめぐる対立していた。この対立は、プロテスタントとカトリックの宗教対立でもあった。バイエルン王国は、カトリックだったので、大ドイツ主義のオーストリア側についていた。

小ドイツ主義と大ドイツ主義の対立

	小ドイツ主義	大ドイツ主義
国	プロイセン王国 (ベルリン)	オーストリア帝国 バイエルン王国 (ミュンヘン)
宗教	プロテスタント	カトリック

シェリングを取り合った2大王国

こうした図式で考えてみると、シェリングはこの対立の犠牲になったともいえる。バイエルンとプロイセンという2大王国が、シェリングを取り合ったのである。

はじめはバイエルン王国がシェリングを取った。確かに、政治的には、バイエルン王国はシェリングの文化行政官としての能力を高く評価した。バイエルン王国から乞われてシェリングはミュンヘンにやってきた。しかし、シェリングは迷ったに違いない。宗教的には引き裂かれていた。シェリングの宗教はプロテスタントであった。プロテスタントのシェリングがカトリックの国にいるのは、逆風の中にいるようなものである。プロテスタントに寛容だったヴェルツブルク大学を去ったのも、カトリックからのシェリングへのいじめがあったためである。カトリックのミュンヘンで、プロテスタントの自分がやっていけるのか。大学教員から行政職への転職とともに、こうした宗教的な矛盾もかかえていた。案の定、こうした矛盾はシェリングの足を引っ張り、彼は哲学の第一線から退いて、「沈黙の時代」へと入ってしまうのである。

やがて、1841年に、プロイセン王国がシェリングを取った。彼はベルリン大学へと移った。ミュンヘン大学からベルリン大学へ移るといことは、カトリックからプロテスタントへと移ることである。プロテスタントのシェリングにとっては、アウエーからホームに戻ったようなものである。ベルリンで、シェリング

は、水を得た魚のように、哲学の魂を取り戻した。

シェリングの「沈黙の時代」は政治的対立の犠牲

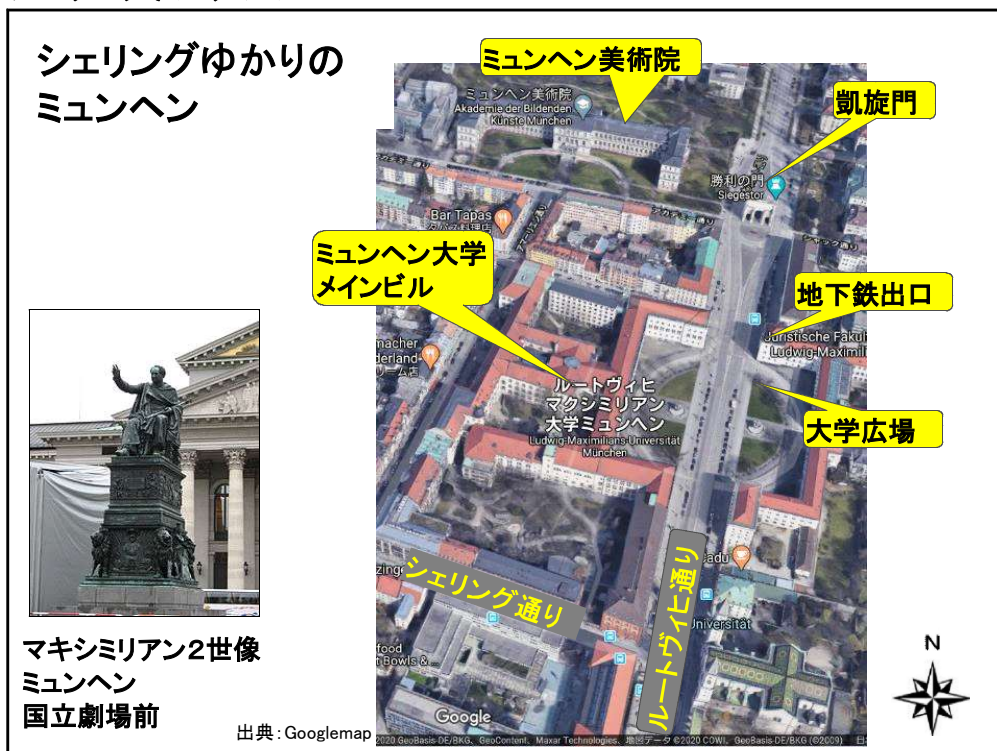
このように考えると、バイエルン時代のシェリングが「沈黙の時代」に落ち込んだのも当然だったのかもしれない。プロイセン王国対バイエルン王国の対立、プロテスタント対カトリックの対立、小ドイツ主義vs大ドイツ主義といった政治的・宗教的な対立に巻き込まれて、両者の取り合いになったシェリングは、その犠牲になったのである。

バイエルン王室のルートヴッヒ1世は、シェリングをプロイセン王国に取られて、非常に悔しかったに違いない。だから、プロイセンに行ったシェリングに対して、マキシミアン2世は、勲章を与えたり、貴族に列したり、「バイエルンに戻れ」というラブコールを送った。しかし、シェリングはカトリックのバイエルンに戻ることはなかったのである。ある意味で、バイエルン王国から高く評価されたことがシェリングの不幸だったのかもしれない。

こうしたことも哲学史の観点では見えてこないことであり、大学論という観点に立って始めて見えてくることである。

シェリングの死後17年たった1871年、プロイセン王国はオーストリア帝国を排除して、ドイツを統一し、結果的には小ドイツ主義が勝つことになった。

シェリングゆかりのミュンヘン



ミュンヘンにはシェリング通りがある。この通りは、シェリングにちなんで、1857年（シェリングの死後3年）に命名された。この通りの周辺にシェリングのゆかりの場所が集まっている。

地図に示すように、シェリング通りと直交するのはルートヴッヒ通りである。この通りは**ルートヴッヒ2世**が作ったものであり、通りをまたいで凱旋門（勝利の門）がある。

ルートヴッヒ通りの両側にミュンヘン大学のメインビルがある。シェリングも1827年からこの大学で講義をした。

ミュンヘン大学のすぐ北には、ミュンヘン美術院の巨大な建物がある。**マキシミアン1世**が設立したもので、シェリングが1808年から事務総長をつとめた。

そして、ルートヴッヒ通りと直交して、西に入るのがシェリング通りである。

シェリング通りは、東西2キロメートルに渡って走っている。この通りを西に歩くと、3つのピナコテーク（絵画館）やミュンヘン工科大学が並ぶミュンヘン学芸地区（Kunstareal München）がある。これは、**ルートヴィヒ1世**が、有名なケーニヒス広場の周りに学芸施設を集中させたからである。世界的に見ても、これだけ学術・芸術施設が集中している地区も珍しい。これについては、私のミュンヘン論『ミュンヘンを歩いてみよう』を参照いただきたい。<http://tannoy.sakura.ne.jp/munich.pdf>

ルートヴッヒ通りを南下すると、マキシミアン通りと交わる。この通りは**マキシミアン2世**によって作られたもので、ミュンヘン国立劇場（バイエルン州立歌劇場）があり、その前に**マキシミアン2世**の銅像（左下の写真）が建っている。

このように、シェリングのゆかりの地は、バイエルンの3代の国王、**マキシミアン1世**、**ルートヴィヒ1世**、**マキシミアン2世**のゆかりの地でもある。

⑨ベルリン大学教授 1841～1854年

プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世が、シェリングをベルリン大学哲学教授として正式に招聘し、1841年にベルリン大学に移った。この時シェリングはすでに66歳だったのである。ヘーゲルの死後、10年も経っていた。

ドイツ観念論哲学のビッグ3とベルリン大学

フィヒテ・シェリング・ヘーゲルというドイツ観念論哲学の創始者がみなベルリン大学の教授をつとめたことは興味深い。3人のベルリン大学での足取りを年表にしてみたのが上の表である。3人がベルリン大学に呼ばれたのは決して偶然ではない。そこには政府による政治的な意図が働いたのである。

◆フィヒテ・シェリング・ヘーゲルのバトル 第2ラウンド ベルリン大学

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1810	48 ベルリン大学教授		
11	49 ベルリン大学学長		
12	50 学長を辞任		
13	51		
14	52 死亡		
15～17			4年の空白
18			48 ベルリン大学教授
19～28			49～58
29			59 ベルリン大学学長
30			60
31			61 死亡
32～40		10年の空白	
41		66 ベルリン大学教授	
42～45		67～70	
46		71 ベルリン大学を辞す	
47～53			
54		79 死亡	

3人の項目の数字は年齢

シェリングはなぜベルリン大学に呼ばれたか 人事の裏側

1830年のフランス七月革命への反動により、ヨーロッパ全体で、自由を抑圧する傾向が強まった。シェリングがいたバイエルンでも例外ではなかった。教皇至上権論者の文部大臣の登場により、プロテスタントに対する寛容が取り消され、大学に対する国家統制が強まった。シェリングは、外の大学に出たいと思うようになった。

一方、ベルリン大学では、1831年にヘーゲルが死亡した。ヘーゲル学派が分裂し、ヘーゲル右派、ヘーゲル中道派、ヘーゲル左派の3つができた。この中で、とくにヘーゲル左派が台頭した。彼らは、一切の既成宗教を否定する傾向があり、プロイセン政府は危機感を強めた。そこで、ヘーゲル左派への対抗力として、シェリングに目をつけた。

1841年、ヘーゲルと対決していたシェリングをベルリン大学に呼んで、ヘーゲル学派の力を弱めたいという計画がおこった。シェリングの積極哲学が既成宗教を哲学的に基礎づけることを期待した。

シェリングを呼んだフリードリヒ・ヴィルヘルム4世

プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世（在位1840～1861年）が、シェリングをベルリン大学哲学教授として正式に招聘し、1841年にベルリン大学に移った。ヘーゲルの死後、10年以上も経っていた。この時シェリングはすでに66歳だった。

フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、前述のプロイセン改革を進めたフリードリヒ・ヴィルヘルム3世の息子である。4世はドイツロマン主義の影響を受けて芸術を愛した王として有名である。即位した翌年にシェリングをベルリン大学に呼んだのも、シェリングがロマン派に近い思想家だったからとも言われる。

この頃のドイツは右から左に大きく揺れた時代である。1814年のウィーン体制は崩壊し、社会主義が力をもつようになり、1848年には3月革命がおこり、ベルリンでは市民と軍隊の内戦となった。フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、欽定憲法を制定して事態を収めた。1849年には、フランクフルトでドイツの国民議会が開かれて、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世を「ドイツ皇帝」にしようと決議された。しかし、彼は「民衆によって決められた帝位などにはつけない」として、戴冠を拒否した。これによってフランクフルト国民議会は挫折した。なお、フランクフルト観光で必ず訪れるレーマー広場の聖パウルス教会は、国民議会が開かれた場所であり、今でも自由と民主主義のシンボルとして、ゲーテ賞や平和賞の授賞式の場となっている。

ベルリン大学でのシェリングの講義

シェリングがベルリン大学に呼ばれたのは、積極哲学が既成宗教を哲学的に基礎づけることを期待されたことだったので、これに答えて、シェリングは、「積極哲学」「神話の哲学」「啓示の哲学」といったタイトルの講義をした。また、ヘーゲルを批判する著作や講義をすることにもなった。

ベルリン大学の人々も、積極哲学なるものがいかなる思想であるかを知りたいという期待もあった。シェリングの最初の講義は多数の聴講者であふれた。最初の聴講者の中には、キルケゴール、エンゲルス、バクーニン、ブルクハルトなどがいた。

ヘーゲルを批判する

ベルリン大学の講義において、シェリングは、ヘーゲル哲学を徹底的に批判した。ヘーゲルは、理性や概念にもとづいて存在を把握しようとしたために、存在を本質としてしか把握できない「消極哲学」にすぎない。存在を存在そのものとして、「現実存在」としてとらえる「積極哲学」を主張し、人々を動かした。

しかし、ヘーゲルの名声に比べると、すでにシェリングは忘れられた存在であった。地理的にも、シェリングがいたバイエルン地方は文化的伝統はあったが、ミュンヘン大学は比較的新しい大学であり、飛ぶ鳥を落とす勢いのプロイセンのベルリン大学からみると、地方の新興大学と思われていた。シェリングは、1809年に『人間的自由の本質』を出してから、ほとんど論文を発表しない「沈黙の時代」に入り、すでに「過去の人」とみられるようになっていた。そうしたシェリングがベルリン大学というプロイセンの中心地に呼ばれたわけである。すでに最盛期を過ぎていた老シェリングが、政府の期待通りに、ヘーゲル学派に対抗できることはできなかった。

シェリングはミュンヘン時代から「沈黙の時代」に入り、著書や論文を発表しなかったため、シェリングの後期思想は、著書や論文ではなく、弟子たちが記録した講義録から知られるのみである。たぶん、ベルリン大学に来なかったら、シェリングの後期思想は歴史の波に消えていったかもしれない。積極哲学が陽の目を見るようになったのは、シェリングがベルリン大学に来て、ヘーゲル批判を展開したからだろう。積極哲学が残ったのは、ヘーゲルとのバトルのおかげであるといえるかもしれない。

シェリングも批判にさられる

ベルリン大学では、大きな期待とともに、敵意が待っていた。ベルリン大学はすでにヘーゲル学派の牙城となっていた。ベルリンに行くシェリングは、まさに敵地に乗り込むに等しかった。シェリングへの批判も現れた。

エンゲルスは、『シェリングと啓示、自由の哲学に対する最近の反動の企てに対する批判』という論文を匿名で出した。シェリングの説くキリスト教の神聖性を批判し、キリスト教のあらゆる側面が理性による批判を受けるべきだと主張した。

シェリングがヘーゲルを批判 イェナ以降のシェリングとヘーゲルの関係

シェリングの後期哲学に強く流れているのはヘーゲル批判である。

イェナ以降のシェリングとヘーゲルの関係についてまとめておこう。

1803年に、シェリングはイェナ大学を去って、ヴュルツブルク大学に移った。

1807年に、ヘーゲルはイェナで『精神現象学』を発表し、その序文においてシェリングを罵倒した。

シェリングは、『精神現象学』の序文を読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。

1807年に、シェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって2人の交流は終わった。破門・絶交に近い。シェリングは一生ヘーゲルを恨んだ。しかし、ヘーゲルの批判に対して、シェリングは反批判をすぐには公にはしなかった。

1814年にベルリン大学の哲学教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のままだった。1816年に後任として、3人の候補があげられた。シェリング、ヘーゲル、フリースの3人である。投票の結果ヘーゲルが決まった。シェリングは、正式にヘーゲルに敗れた。

1818年、ヘーゲルはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなしていった。

ヘーゲルよりも先に哲学界にデビューしフィヒテ以上の時代の寵児となったシェリングであったが、20年後にはすっかり栄光から遠のき、今をときめくベルリンのヘーゲルを、ミュンヘンから羨望の目で眺めつつ、落魄の日々を送っていた。ミュンヘンに移ったシェリングのもとをハイネが尋ねた。その時に、シェリングは「わしのアイディアをヘーゲルは奪い取った」とぐちったという（バウムカルトナー『シェリング哲学入門』）。

シェリングとヘーゲルは絶交後、2回だけ偶然出会う機会があった。1812年にニュルンベルクで、1829年にカルルスバートで、ヘーゲルは師シェリングと偶然に出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。

1831年、ヘーゲルが亡くなった。シェリングはヘーゲル批判を公にはしなかった。彼がヘーゲル批判を公にするのはその3年後のことである。

1834年、シェリングは、クーザンの著書『哲学的断片』第2版に序文を寄せて、次のようにヘーゲルへの批判を公にした。

「ヘーゲルの哲学は、シェリングの同一哲学を完成したものであっても、これを一步も前進させたわけで

はない。同一哲学によっては、あるものが何であるかということは説明できても、それが現にあるということは捉えられない。「現実存在」は「本質」に解消されるものではなくて、これに積極的に加わるものである。この積極的なものを問題にすることを標榜して、彼は後期の哲学を「積極哲学」と呼び、考えられぬものではないというだけの消極的本質を扱った前期の哲学を「消極哲学」と呼んで、両者をはっきり区別する。もちろん消極哲学そのものを無意味というのではない。しかし、ヘーゲルのように、論理的、観念的な限定をそのまま実在的な運動と主張するのは、明白な誤りである」（服部・井上、1955）『ブルーノ』訳者解説

1841年、シェリングはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルの死から10年が経っていた。ヘーゲル哲学の牙城であるベルリン大学でも、シェリングはヘーゲル批判を続けた。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない」と考えていた。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。理論的な装いをしているが、シェリングの積極哲学の底にはヘーゲルへの恨みがあると思われる。

パウルスとの戦い

神学者ハインリヒ・パウルスは、前述のように、イエナ大学時代はシェリングと仲が良かったが、後に仲が悪くなった。1843年に、『ついに顕わとなった啓示の積極哲学』というタイトルでシェリングの講義録を無断で出版した。

ちなみに、パウルスの娘ゾフィーは、かつてのカロリーナの夫ヴィルヘルム・シュレーゲルと1817年に結婚した。これもシェリングへの嫌がらせに近いかもしれない。パウルスの妻は作家として有名である。

パウルスの無許可出版に対して、シェリングは訴訟をおこした。ところが、1846年、この裁判にシェリング哲学は負けてしまった。これによって、講義が出版に対して保護されていないことを知って、シェリングは、ベルリン大学での講義をやめた。大学での聴講者の数もしだいに減っていたという。

71歳のシェリングは、大学を辞任した。その後、1852年まで科学アカデミーの講演でしか公衆に接しなかった。

ヘーゲル学派の消滅

1848年のドイツ3月革命によって、ドイツでは旧勢力（封建制社会）から新勢力（自由主義・社会主義）へと転換がおこった。ヘーゲルの弟子たちによる哲学的運動は、3月革命で終わった。シェリングの宿敵だったヘーゲル学派は消滅し、シェリングの意図ははからずも達成された。その後、19世紀後半には、ヘーゲル哲学は支配力を失い、かわって「新カント派」が主流となったが、ヘーゲル左派の思想は、マルクス主義と実存主義哲学とに受け継がれていくことになる。

晩年のシェリング 大学辞任後

バイエルンのマキシミリアン2世は、前述のように、ずっとシェリングに対する尊敬を持ち続け、1849年、シェリングに対してバイエルン大十字勲章を与えた。また、1853年にはシェリングを貴族に列した。晩年のシェリングは社会的な名誉が与えられた。

シェリングの死

1854年8月20日、療養に出かけたスイスの温泉地バート・ラガッツで病を悪化させ、家族に見守られて生涯を終えた。享年79。シェリングの墓はこのバート・ラガッツにある。

同じ年に妻のパウリーネも亡くなった。

現在、ベルリンのドロテーエンシュタット墓地には、フィヒテ夫妻とヘーゲル夫妻の墓が隣り合っている。ふたりはベルリン大学学長をつとめた。ところが、ドイツ観念論哲学のビッグ3であるシェリング夫妻の墓はベルリンではなくて、スイスの温泉地にある。このことから晩年のベルリン大学におけるシェリングの位置がわかる。

シェリングの後期思想

ミュンヘン時代以後のシェリングの思想は「後期思想」と呼ばれる。以下、これを辿ってみよう。

神と実存の根拠

シェリングの哲学がドイツ観念論の代表とみられるのは同一哲学までである。シェリングの後期の哲学は、同一哲学を否定して、非理性的思想へと向かった。

シェリングは1804年に『哲学と宗教』を書いて、宗教論に関心を移した。この本は、エッセンマイヤーという人が「汎神論は真に宗教を認めることはできない」という批判をしたために、それに答えたものである。

1809年に、シェリングは論文『人間的自由の本質』を発表した。この論文は、シェリングが後期哲学への一歩を踏み出したものといわれる。ヘーゲルの批判を受けて、シェリングは、汎神論を捨てて有神論へ向かうのである。

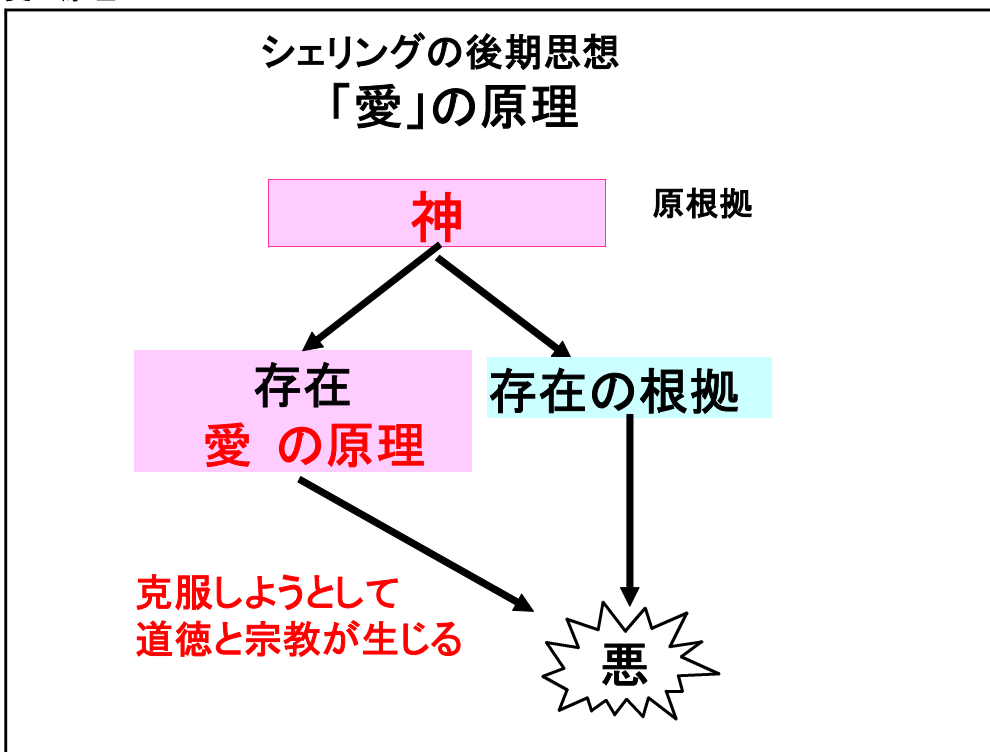
ヘーゲルは、「絶対的同一性である絶対者からどうして有限者が生じてくるのかが説明できない」といつてシェリングを批判した。

これに対して、シェリングは、「存在」と「存在の根拠」とを分けた。有限者の場合は、「根拠」があるから、ものは存在する。つまり、「存在の根拠」があるから「存在」がある。この「存在の根拠」こそ「絶対者＝神」である。神があるから有限者は存在する。こうして絶対者から有限者があらわれることを説明した。

ところが、それを「神」において考えると、矛盾が生じる。つまり、神の「存在」と、神の「存在の根拠」は、どちらが先だろうか？ 根拠があって初めて存在があるのだから、神の「存在の根拠」があって、始めて神の「存在」があるはずである。ところが、神は絶対であって、神が「存在」しなかったら、神の「存在の根拠」もありえないのだから、神の「存在」があって始めて、神の「存在の根拠」があることになる。このように、一方では「存在の根拠」→「存在」なのに、他方では「存在」→「存在の根拠」という順番となり、互いに矛盾する。

こうした議論は、私には単なる言葉の遊びにしか見えない。ヘーゲルの批判に答えようとしても、どうしても矛盾が出てくる。その後、後述のように、シェリングは「啓示の哲学」の中で、神の自由意志でいっきに解決をはかることになる。

愛の原理



1809年の『人間的自由の本質』では、シェリングは、図のように、神の愛の原理を強調する。

シェリングによると、神は愛であるが、神が自己啓示を行うためには、「存在」と「存在の根拠」に分かれなければならない。その「存在の根拠」から「悪」が生じるのである。その悪を、存在としての神が、「愛の原理」によって克服しようとして、道徳や宗教が生じる、という。

「存在」と「存在の根拠」に分かれる前の神は、根源的なものであり、「原根拠」と呼ぶ。

「愛」の原理というものが唐突に出てくるが、これはカロリーネとの関係とも関連するのかもしれない。それにしても、前期の同一哲学の図式から何と変わったことであろう。

同一哲学の否定

こうしたシェリングの議論では、神を、存在と根拠という2つの要素に分けている。同一哲学では、絶対

者＝神は、同一で無差別のものとされていたのだから、絶対者を要素に分けた時点で、同一哲学を否定していることになる。ヘーゲルの批判に答えようとして、シェリングはみずからの同一哲学を否定することになった。

汎神論から有神論へ

さらにシェリングは、神が自己実現しようとする意志から、有限者が生まれるという。まず神の根源的な意志があって、これによってすべての有限の事物が生まれる。神というものを意志的なものと考えている。

同一哲学では、汎神論的にすべてのものに神があった。これに対し、後期思想では、神は意志を持つ人格神となった。汎神論は捨てられ、有神論へと変わったのである。大逆転である。前期の同一哲学の思想は捨てられた。

啓示の哲学

1827年の論文『哲学的経験論の叙述』において、シェリングは、神の世界創造は、全く神の自由な意志によると考えるに至った。神の意志は全く自由であって、何をするとも、何をしないことも自由である。神がなぜ世界を創造し自己を啓示したのかは、われわれの理解しうるところではない。神を理解することなどはできない。われわれは、ただ神の「啓示」を根源的な事実として受け入れるほかはない。これが「啓示の哲学」である。

ヘーゲルからの「絶対者からどうして有限者が生じるのか」という批判に答えようとして失敗し、シェリングは、「それは神の意志によるとしか答えられない問題だ」という答えに行き着いたことになる。最もシンプルな答えだが、開き直りともいえるべきであって、答えをあきらめたことになる。

神の意志と妄想形成

シェリングは、何でもすべての理論を整合的に体系化しすぎる。あらゆるものを完全に体系化しようすると、無理が出る。その無理を統一的に説明してくれるのは、もはや「神の意志」しかない。神の意志は、実に都合の良い措置である。何でも困ったときには「神の意志」と説明すれば片づく。シェリングに対するヘーゲルの批判は、「無限者からなぜ有限者が生じるのかがわからない」というものだが、この批判にどのように答えたら、答えたということになるのだろうか。結局、シェリングは、「神（無限の絶対者）が意図したので有限者が現れた」と答えることになるが、そのように「神」という都合のよいオールマイティのカードを持ち出すしかないだろう。そもそも「神学」とはそのようなものである。

私は、昔、SF作家フィリップ・K・ディックの『ヴァリス』という作品について、妄想形成を論じたことがある。「レム論あるいはレムのSFはどこがすごいか」に収録。 <http://tannoy.sakura.ne.jp/Lem2019-10-26.pdf>

そこで思うのは、妄想という現象には、あらゆる事実を合理的かつ無矛盾に説明しつくそうとする過剰さがあるということである。精神病理学でいうトレマ（妄想気分）からアポフェニー（妄想構築）にいたる経過は、推論自体をみると異常というわけではなく、むしろ合理的かつ齊合的であることが多い。それよりも、あらゆる事実を合理的かつ無矛盾に説明しつくそうとする過剰な認知欲求こそ、パラノイアのものである。シェリングの哲学を見ていると、あらゆるものを矛盾なく完全に整合的に体系化しようとする過剰さを感じる。そして、あらゆる事実をすべて説明してくれるものこそ、「神」という装置なのである。あらゆる事実をすべて矛盾なく体系化するためには、どうしても最後は「神の意志」というものを考えなければならなくなる。妄想形成と同じなのだ。

啓示と神話の哲学



「啓示」とはキリスト教における用語であるが、キリスト教以外の他の民族では、「神話」において示されているので、シェリングは神話の哲学も考えた。後期のシェリングは、神の生成を論じる「神話の哲学」や、生成の完成としての啓示を論じる「啓示の哲学」に没頭した。そこで後期思想は「啓示と神話の哲学」と呼ばれる。

ここで、これまでのような理性主義の哲学は捨てられ、非理性主義の思想へと転向した。それは哲学というよりは神学であり、カント哲学からの後退である。

積極哲学

シェリングが最終的に行き着いた立場は『積極哲学』と呼ばれる。これを表に示す。

◆シェリングの消極哲学と積極哲学

「だめだね」× 	「いいね」○ 
消極哲学	積極哲学
「本質」の研究 対象について「何であるか」を問題にする	「存在」「実存」の研究 「事物がなぜ現実存在するか」を 問題にする
哲学以外のすべての学問 ほとんどの哲学	哲学のみが扱える
シェリングの前期思想 (同一哲学) ←	→ シェリングの後期思想
ヘーゲルの哲学	

岩崎 (1974) を参照

哲学以外のすべての学問は「本質」の研究である。「本質」の研究とは、対象について「何であるか」を研究することである。しかし、こうした研究では「なぜにこのものが存在するのか」を問おうとしない。哲学においても、これまでの哲学は、本質について論じているにすぎない。たとえ神（絶対者）を論じていても、単に本質を論じているにすぎない。こうした哲学は「消極哲学」にしかすぎない。

真の哲学というものは、「事物がなぜ現実存在するか」を問題にしなければならない。哲学だけ「存在」「実存」について研究することができる。この問題に答えようとする哲学こそ、「積極哲学」である。

シェリングは、消極哲学と積極哲学の両者によって完成されるという包括的な哲学を考えた。とはいえ、消極哲学よりも積極哲学のほうが重要だとしている。こう区別すると、シェリングのこれまでの同一哲学は、消極哲学にすぎなかったという。

われわれが神について理解できるのは、ただ「本質」のみである。神の「実在」はわれわれの理解できるところではない。啓示によって積極哲学となる。

しかし、シェリング自身も、ベルリン大学の就任演説で、積極哲学とは、「今まで不可能と考えられていた学問」を付け加えようとするのだと言っている。

そもそも、積極哲学とは可能なのだろうか。何となく意図は理解はできるが、「事物がなぜ現実存在するか」をどうやって説明できるのか。神の実存を理解することはどうやってできるのかわからない。神の実存を理解するというのは神学であって、言葉遊びのようにしか思えない。

実存主義哲学への影響

本質と実存を分けるシェリングの後期思想は、のちの実存主義哲学の先駆と考えられている。

後に実存主義をうちたてるキルケゴールは、ベルリン大学でシェリングの講義を聴いて、はじめは非常に感激したという。しかし、やがてその講義に失望して、早々にベルリンを引き上げてしまったという。なぜだろうか。

実存主義は、たしかに本質と実存を区別するが、人間にとって、実存は本質に先立つものであり、そこから人間はいかに生きるべきかを考える。これに対し、シェリングの積極哲学は、人間や自然の生成ではなく、「神」の生成に関心があった。「神の実存」を扱う積極哲学と、「人間の実存」を扱う実存主義哲学には大きな隔りがある。

つねに変身するプロメテウス

シェリングは主張を大きく変えた哲学者である。「つねに変身するプロメテウス」と呼ぶ人もいる（藤田、1962）。

はじめ神学を研究していたが、カントの影響を受けて哲学に関心を移し、フィヒテの自我哲学に熱中した。フィヒテの説を補うために「自然哲学」を取り入れたが、これによってしだいにフィヒテから独立し、「超越論的観念論」を発展させて、ついに「同一哲学」として完成させた。しかし、同一哲学はヘーゲルから根本的な批判を受けた。その後、啓示と神話の哲学に向かった。ヘーゲルの死後、ベルリン大学に呼ばれて、ヘーゲル学説を徹底的に批判し、積極哲学をとらえた。

ハルトマン (2004) は次のようにいう。

「シェリングはどのような新たな思想にも開かれており、いつでも学び直すことをいとわないし、・・・新たなものを摂取するためであれば、それまでの仕事の成果をよるこんで犠牲にする。彼は、・・・習得においてつねに創造的であり、学びなおすことにおいてつねに生産的であり、かつて発見したものの活用においてつねに一貫している。彼にあっては、根本的な思想革命にもつづいて新たな体系が生まれてくることも5回をくだらない」 ハルトマン (村岡ほか訳) 『ドイツ観念論の哲学 第1部』

ここでハルトマンがいう5つの「新たな体系」とは、次のとおりである。

(1) 1799年までの自然哲学

- (2) 1800年頃の超越論的観念論
- (3) 1801～1804年までの同一哲学
- (4) 1809年頃の自由の哲学
- (5) ほぼ1815年以降の後期シェリングの宗教哲学的体系

カント・フィヒテ・ヘーゲルは、それぞれ固い理論枠組みがあつて動かしにくい。これに対し、シェリングはどんどん動いていく。これは哲学者としてはよくない傾向なのかもしれないが、それがシェリングの面白さかもしれない。

哲学のデパート

シェリングには哲学のすべてがある。観念論と実在論、生氣論（有機体論）と機械論、汎神論と有神論、自然あり、芸術あり、神学あり。ないものはない（ヘーゲルなどに比べると、法学など社会的な対象がやや手薄といったところだろうか）。シェリングを読んでいれば、いろいろな哲学を体験できる。そのバリエーションのため、本論を書いても楽しかった。「哲学のデパート」のような趣きがある。

シェリングは優秀なので、あらゆる知識や思想をあっという間に吸収して、自分の体系に組み入れる。観念論と実在論、汎神論と有神論といった対立軸をものともせず、どんどん組み込んでいき、一見するとメチャクチャに見えるが、それらを矛盾なく体系化してみせる。その自由さもすごい。とはいえ、結果的に、晩年には「すべてを絶対者（神）の意志」としたのは、カント哲学からの後退であった。

シェリングが自然哲学と自我哲学を同列に置いたことは、哲学史の中では、新鮮でオリジナルなことである。人間も自然も同じルーツを持つという発想はSF的である。シェリングの哲学が現代でも研究対象となっているのは、こうした珍しさもあるのではなかろうか。

「敗者としてのシェリング哲学」観

シェリングは、主流のヘーゲル派からは、ドイツ観念論哲学の歴史において、シェリングはヘーゲルを準備しただけの役割にすぎないとみられている。藤田（1962）は次のように、シェリング哲学は「敗者の哲学」だと総括している。

「シェリング哲学は時代の現実から言えば敗者の哲学であった。そしてシェリングの一生がただ一筋に哲学に献げられてあつた限り、彼の一生もまた敗者の一生であった。彼はその若い頃ロマン主義華やかかなりし時代に大なる盛名を喧伝したにしても、それはやがてヘーゲル哲学の圧倒的勝利に終わって、彼の哲学はその蔭にかくれて乗りこえられてしまった。彼は後にヘーゲル哲学を近世哲学のエピソードだというのが、むしろ彼の哲学こそはエピソードに過ぎなかったのである。そして彼はその隠棲の中にあつてヘーゲルへの反撥を漏らしつつも、長い間なんらの公けに発表するものさえもたなかった。その間につちかわれたものをもって彼がベルリンに返り咲いた後も、彼はまた既に時代にのりこえられて、再び隠棲に退かざるを得なかったのである。それはヘーゲルにおいて我々の眼にする着実に一步一步築かれて行った事業と盛名に比して何という対照であろう。その意味で彼の哲学は社会的に敗者の哲学であるばかりでなく、またその内容においてもまた、完成には程遠く、ヤスパースも指摘するように、全体として多義的であり、必ずしも明確な一貫した論理に貫徹されていず、むしろ幾分ラブソディッシュでさえあり、その中には様々な動機が混在して、すべてが相まち相連なって壮大な全体となっているとは言い難い。したがって、人はその中に何をよみとるかによって彼に対する評価は異なる」 藤田健治『シェリング 思想学説全書11』、勁草書房、1962.

このような論評は少しシェリングに厳しすぎるように思える。藤田（1962）も、この論評はシェリング批判をすることが目的ではなく、続けて述べる次の文に力点がある。「この敗者の哲学を通じて吾々が深く打たれるものは彼の不屈にして不退転の学的精進であると共に、あらゆるものに対する鋭敏な直観的反応である」と。

確かに、ヘーゲルがドイツ観念論哲学の王道であり、シェリングは、ヘーゲルを登場させて歴史的な使命を終えたというのは間違いではないかもしれない。しかし、シェリングは本当にヘーゲルの踏み台にすぎなかったのだろうか？ 本当にシェリング哲学は敗者の哲学なのだろうか？

シェリング哲学は敗者の哲学ではない

ドイツ観念論哲学のビッグ3の中で、人間関係の要の位置にいたのがシェリングである。フィヒテに呼ばれてイェナ大学に行ったのはシェリングであり、ヘーゲルをイェナ大学に呼んだ張本人はシェリングであった。もしシェリングがいなければ、フィヒテとヘーゲルは結びつかなかった。ドイツ観念論哲学のキーパーソンとなったのがシェリングである。もし、シェリングがいなかったら、ドイツ観念論哲学は存在しなかったかもしれない。少なくとも、カント→フィヒテ→シェリング→ヘーゲルという思想的な影響関係はもっと薄いものになったに違いない。このことはもっと強調されてよいことである。

また、哲学の思想内容をも、フィヒテの自我哲学からシェリングの同一哲学への発展はユニークであった。シェリングの批判を受けて、晩年のフィヒテは絶対者の哲学へと考えを変えていった。

また、ヘーゲルは、テュービンゲン大学時代にシェリングの影響で哲学に関心を持った。そして、イェナ大学では、シェリングの超越論的観念論の汎神論的な影響を受けて、シェリングとともに哲学雑誌を発行した。最終的にヘーゲルはシェリングの同一哲学を批判することになるものの、もしシェリングがいなかった

ら、ヘーゲルが観念論哲学を発展させたかどうかはわからない。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない」と考えていたし、ミュンヘン時代のシェリングがハイネに対して「ヘーゲルはわしのアイディアを奪い取った」と愚痴ったのも、あながちシェリングのひがみだけではないだろう。

このように、思想的に見ても、もしシェリングがいなかったら、ドイツ観念論哲学が完成していたかどうかはわからない。

シェリングは決してヘーゲルの踏み台だけの存在ではなかった。シェリング哲学を敗者の哲学と呼ぶのは主流のヘーゲル派の一方的な見解にすぎない。しかも、近年では、晩年の積極哲学は実存主義哲学の先駆として評価されている。

大学人としてのシェリングの生涯

52歳で死んだフィヒテや、61歳で死んだヘーゲルに比べると、79歳まで生きたシェリングは長生きである。しかも、シェリングは71歳まで大学の教壇に立った。やはり根っからの大学人であった。

シェリングは、15歳で大学に入り、それからずっと大学ですごしてきた。シェリングが大学にいなかったのは31歳～45歳までの14年間と、最晩年の8年間だけであった。これに比べると、浪人生活が長かったフィヒテや、新聞記者や高校校長なども長く勤めたヘーゲルは、大学に所属していない期間が長いのである。

シェリングは、大学で講義をおこなってこそ能力を発揮して輝いていた。大学を離れてしまうと、学問の生産性は低下した。パーソナリティとしても、大学人的なパーソナリティといえるだろう。

<参考文献>

- 丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ:精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
シェリング（西谷啓治訳）『人間的自由の本質』岩波文庫、1975.
シェリング（服部英次郎・井上庄七訳）『ブルーノ』岩波文庫、1955.
シェリング（勝田守一訳）『学問論』岩波文庫、1957.
シェリング（松山壽一編）『シェリング著作集1 b 自然哲学』燈影舎、2009
岩崎武雄「フィヒテとシェリングの生涯と思想」 『世界の名著 続9 フィヒテ シェリング』中央公論社、1974.
服部英次郎・井上庄七「解説」 シェリング『ブルーノ』岩波文庫、1955.
藤田健治『シェリング 思想学説全書11』、勁草書房、1962.
勝田守一「解説」 シェリング『学問論』岩波文庫、1957.
池田全之『シェリングの人間形成論研究』福村出版、1998.
ハルトマン（村岡ほか訳）『ドイツ観念論の哲学 第1部 フィヒテ、シェリング、ロマン主義』作品社、2004.
フィッシャー（玉井茂・磯江景孜訳）『ヘーゲルの生涯：著作と学説第1巻 ヘーゲルの生涯』勁草書房、1971.
ヤスパース（那須政玄・高橋章仁・山本冬樹訳）『シェリング』 行人社、2006.
バウムガルトナー（北村実監訳）『シェリング哲学入門』 早稲田大学出版部、1997.
河野真『シェリングの実践哲学研究』以分社、1973.
西川富雄監修『シェリング読本』法政大学出版局、1994.
松山壽一『叢書シェリング入門2 人間と自然：シェリング自然哲学を理解するために』 萌書房、2004.
松山壽一・加國尚志編著『シェリング論集4 シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房、2004.
ゲーテ（前田富士男・高橋義人訳）『自然と象徴—自然科学論集』 富山房百科文庫、1982.
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩き方』有斐閣、2015.

●元のページに戻る

<http://tannoy.sakura.ne.jp/>